

人材育成プログラム… 自立への旅立ち

16,936人が参加しました！



第47回 アカデミックホームステイプログラム

研修企画（順不同）

エフエム大分

長崎新聞社

宮崎日日新聞社

南日本新聞社

琉球新報社

旅行企画

南日本カルチャーセンター

後 援（順不同）

在沖米国総領事館/鹿児島県教育委員会/大分県教育委員会/長崎県教育委員会
熊本県教育委員会/沖縄県教育委員会/鹿児島市教育委員会/宮崎市教育委員会
大分市教育委員会/長崎市教育委員会/別府市教育委員会/佐世保市教育委員会
延岡市教育委員会/日向市教育委員会/西都市教育委員会/都城市教育委員会
日南市教育委員会/小林市教育委員会/えびの市教育委員会/串間市教育委員会
宮崎県市町村教育委員会連合会/宮崎県県立学校長協会/宮崎県校長会/宮崎県
PTA連合会/宮崎県高等学校PTA連合会/鹿児島県PTA連合会/沖縄県PTA連
合会/長崎県PTA連合会/佐賀県PTA連合会/鹿児島県小学校教育研究・外
国語科研究会/鹿児島県中学校教育研究会英語部会/鹿児島県高等学校教育研
究会英語部会/長崎県英語教育研究会/大分県中学校英語教育研究会/宮崎県中
学校教育研究会英語部会/沖縄県中学校英語教育研究会/沖縄県高等学校英語
教育研究会/鹿児島県海外子女教育・国際理解教育研究協議会

次代を担う国際人として

南日本カルチャーセンター

代表取締役社長 濱 田 純 逸

あらゆるものがスピード化され、国際間の文化、経済、教育など相互の交流はますます盛んになり、昨日まで全く関係のなかった遠い外国の人たちと、話し合わなければならないような機会が多くなっており、「地球はひとつ」という言葉が現実となりつつあります。

このような国際情勢の中で、これから活動していくには、世界各国の言葉、生活習慣を理解し、尊重しなければ、真の協調は生まれないと言えます。

次の時代の日本を担う青少年のみなさんが、この機会に海外生活を体験し、国際感覚を育成され、世界に雄飛する人に成長されることを祈念してやみません。

プログラム参加者数

県 別	小・中学生	高校生	大学生	合 計
福 岡 県	65	59	67	191
長 崎 県	387	181	38	606
佐 賀 県	813	244	50	1107
大 分 県	881	442	45	1368
熊 本 県	1784	916	99	2799
宮 崎 県	1917	441	95	2453
鹿児島県	4360	1619	234	6213
沖 縄 県	1127	843	111	2081
そ の 他	77	29	12	118
合 計	11411	4774	751	16936

保護者の皆様へ

今から約45年前、初めてホームステイに参加する生徒たちが、九州各県の駅から出発する時、(当時は、羽田空港まで、九州から国鉄と新幹線を利用して行っておりました。)参加者と保護者が抱き合っ、人目をばかすることなく、涙を流しながら別れる光景が、各駅のどこでも見られたものでした。しかし、昨年の出発光景で、泣き別れる生徒と保護者は、どこにもいっしません。何故、親子が涙ながらに別れていたのが、笑顔で別れるようになったのでしょうか。この変遷の中に、日本のホームステイの価値の変容が凝縮しているといっても過言ではありません。

45年前の涙は、アメリカに行く子も、送り出す親も、未知の世界に旅立つ不安と恐怖の涙だったのです。「ホームステイ」という言葉すら市民権のない時代ですから、1カ月間も、言葉も分からないアメリカ人家庭で、無事過ごしてこられるだろうかという恐ろしさは、想像以上のものでした。周囲にホームステイ参加者は一人としていない、ましてや、初めて海外に行くという生徒とその保護者ばかりですから、みんな真剣に取り組んだものです。事前の英語の学習や自文化学習でも、異文化学習でも、参加者には誠実で、真摯な国際交流に臨む姿勢と意気込みがありました。

ステイ地の市長に表敬訪問に行った際、市長の英語が、ほとんど分からないにもかかわらず、ノートを片手に、一生懸命に記録を取る中学生の姿が、その象徴的なものでした。それが現在においては、説明する市長の英語をかたわらに、市長の椅子に座りながら、右手はピースのポーズでお互いに写真の撮り合いをする、そんな様子を時々目にするようになりました。誰もがホームステイという言葉を使うようになり、ホームステイ参加者が周りに溢れるようになり、着実に、国際交流の輪は広がっているのかもしれません。特に、観光旅行の一形態としてホームステイが実施されるようになって以来、学生時代に一度は、ホームステイや留学で海外に出かけるのは、珍しくもなく、むしろ当然といったような風潮も見られるようになりました。その結果、ホームステイは本来の民間の国際交流や異文化学習の場としての位置から離れ、「学生のための海外旅行」としての要素を内包しつつ、観光旅行化してきております。さらに、ホームステイに気軽に参加できるこの「気軽さ」が、「安易さ」に変化しつつあります。

45年前、保護者は、何故、高額な参加費用を、子どもさんのためにお支払いされたのでしょうか。それは、保護者がホームステイを「異文化学習の場」と理解されていたからにはかなりません。21世紀に生きる子どもたちには、国際感覚と英語力が必要と痛感して、ホームステイの成果に、それらのものを期待していたわけです。すなわち、ホームステイを教育的なものとしてとらえ、「かわいい子には旅をさせよ」という気持ちで、その参加費用を支出されていたのです。だからこそ、出発の時に、涙を流して別れるほどの悲しさがあっても、帰ってくる時の子どもの成長を思えば、送り出すことができたわけです。私も今でも、この45年前の出来事の中に、このプログラムの原点を見ることが出来ます。

「何故行くのか?」「ホームステイとは一体何なのか?」「ホストファミリーとは?」「真の相互理解とは?」などの様々な疑問を、参加する側も、ホームステイ主催者側も、もっと真剣に受け止め、考えてみる必要があるのではないのでしょうか。「行きたいから行く」「子どもが行きたいというから行かせる」という考えではなく、「生徒はどのような目的で行くのか」「保護者は、どのような目的で行かせるのか」という視点で考え、ホームステイ主催者は、「ホームステイを通して、生徒、学生に何を学ばせ、何を伝えさせるか」という具体的な視点が必要になってくると思います。

ホームステイとは、「文化的戦場」です。異なる文化を持つものが、共同生活をすれば、そこに摩擦や不適応が発生するのは当然です。ですから、参加者は、表面的に外から眺めるだけの観光旅行とは、根本的に異なるものであるという事を知らなければなりません。言葉も違う、他人の家庭に入り、共に生活する事がホームステイなのであり、その方法で異文化を学習するので、それは不自由な生活を常態とするものであると考えなければなりません。そして、同時に、彼らからすれば、参加者を通して、日本人を見、日本を知るという事に他なりません。つまり、参加者がアメリカにホームステイに行くという事は、日本人や日本を見せに行くという側面をも有しているのです。

センターでは、真のホームステイとは、参加者にとって「環境に適応しなければならない不自由さ」、「言葉を自由に使えないいらいだち」、「日本の家族や両親と会えない孤独感」、「他人の家庭で生活する不安」などの幾多の困難が待ちかまえており、それらの苦難をどのように乗り越えて行くかが、ホームステイの最も価値ある側面であるとの認識を持っております。困難があるからこそ、「かわいい子には旅をさせよ」と言い続けられているのであって、観光旅行やお買い物ツアーに、保護者が金銭的負担を負ってまで、旅をさせる意味などないのではないのでしょうか。

参加者には、いつも「学習する姿勢」を求めます。それは、「机上における学習」ではありません。「異なる文化を観察し、異なる価値観を理解し、異なる言語を使う体験学習」です。他人の家庭で過ごす事による「精神的自立」と「社会性」を養う体験学習でもあります。これらのセンターのホームステイ理念を、充分にご理解いただき、その認識の上に立って、ご参加をご検討いただきたいと思います。

参加する皆さんへ

このプログラムは、1974年に始まりました。おそらく、日本全国で行われている数多くのホームステイの中で、最も歴史の長いホームステイプログラムの一つだろうと思います。1974年に大学4年生で参加された先輩は、今年69才になられますし、そして、参加する皆さん方全員が、生まれる前からあったことを考えますと、その歴史を理解できると思います。また、歴史だけでなく、これまで参加されました、皆さん方の先輩は16,936人にも上り、一つのプログラムの参加者数としても、おそらく、日本有数の、ひょっとしたら、日本で最も参加者数の多いプログラムかもしれません。さらに、このプログラムに参加された先輩方で、その後、高校留学された方、大学留学された方、語学留学された方など、合計すると1,000人を超えており、現在でも、社会的に様々な分野で活躍され、このプログラムをきっかけとして大きく人生や進路が変わったという方々が、たくさんいらっしゃいます。（詳細は、センターホームページの「ホームステイの実態調査」を参照してください。）皆さんは、現在、ただ単に、ホームステイに参加してみようと思っているかもしれませんが、先輩達の言葉を借りれば、「人生を変えた夏」ということになりますので、ホームステイを実りあるものにするため、申し込まれる前に、しばらく、次のようなことなどを考えてみてください。

このホームステイは、観光旅行ではありません。「体験学習」であり、「人材育成」プログラムです。遊び気分で参加したり、海外旅行に行くような気持ちで、楽しさばかりを期待して、参加しようとしているのであれば、このプログラムは決して満足できるものではないと思います。なぜなら、このホームステイは、生活体験や文化交流による「異文化学習」が、その大きな目的であり、日本の家族を離れ、異なる環境の中で、一人で生活することによる「自立」もまた、目的の一つとしています。ですから、観光をしたり、買物をしたり、いろんなところに遊びに行ったりすることを目的とはしていません。

異国で、異文化の中、英語という道具を使って、他人の家庭で生活することを考えてみてください。おそらく、いろんな出会いがあると思います。いろんな文化の違いも発見できると思います。戸惑いや驚き、動揺も感じるでしょう。いろんな楽しさも体験できるかもしれませんが、でも、ホームシックのような寂しさも体験すると思います。おそらく嫌なこともたくさん起こると思います。悲しいこと、涙を流したくなるようなこともあるでしょう。そして、ホストファミリーとの苦しくなるほどの別れの悲しみと感動も、このプログラムで体験することの一つだと思います。センターでは、皆さん方の体験する、これら一つ一つの、すべての体験が、学習であると考えています。

いつも「学ぶ」姿勢を持ってください。「何のために、ホームステイに参加するのか」「ホストファミリーに、何を伝えるのか」「自分は、ホームステイで、何を勉強するのか」などという気持ちを決して絶やさないでください。皆さんが体験する出会いも、出来事も、感情も、感動も、参加者によってみんな異なります。各自が自分の体験から、何を学ぶかは異なってきます。そして、自ら考え、自ら学ぶ姿勢がなければ、体験を通して学ぶ価値が半減してしまいます。すなわち、体験という名に値するほどの「価値」を、そこから学習することなく、単なる感情の高ぶりや感想だけで、終わってしまうことになります。これまでの参加者が帰国した後、すなわち異文化体験をした参加者が、自国に帰って、どのような影響を受けていったかを考えてみれば、ある程度、その謎を解くことができます。帰国後の参加者たちは大きく二通りに分けることができます。一つは帰国時に大きく膨らんだ異文化体験の刺激と興奮が、時間の経過とともに萎んで、後には「楽しい思い出」と「また行きたい」という思いが、漠然とした英語や留学に対する「夢」として残るだけのケースです。もう一つは異文化体験の刺激と興奮が、自分の人生に生きがいや目標を与え、日本での生活に前向きに作用し、これまでには見られなかったほどエネルギーで、積極的な言動が生み出されているケースです。センターが参加者に望むのは、二番目のケースに参加者全員がなってもらうことです。

英語が自由に使えない皆さんが学ぶためには、言葉を使うよりも、積極的に、自ら進んで、挑戦、トライするしか方法はありません。体験しながら、学び、考え、反復、修正しながら、身をもって実践、学習していくわけです。この「積極的に、いつでも学ぶことに前向きな姿勢」が、プログラム期間中に最も望まれることなのです。

そして、英語の学習も大切です。センターでは、出発までに皆さんが英語の自主学習をできるように、アメリカの家庭生活が必要とされる、日常英会話文を238文選定したものを配布しています。参加者は、その会話文を暗記しなければなりません。また、5月末から7月にかけて2回、オリエンテーション（事前研修会）を開催し、生活習慣の違い、考え方の相違、比較文化、公共道徳やマナー、危機管理やケーススタディなどを勉強してもらいます。これらの学習を積んでこそ、価値のあるプログラムにつながっていきます。ただ参加するのではなく、事前に多くの学習をして、常に学ぶ姿勢を持って参加して欲しいと思います。



このプログラムの特色

☒ 国際理解の学習の仕方を具体的に指導する

ホームステイに参加するだけで、国際理解学習ができると考えるのは、保護者の皆様を始め、学校の先生方、また、数多くの参加者達が考える最大の誤りです。しかしながら、現在でもホームステイに参加しさえすれば、国際色豊かな体験ができるものと、誤解され続けております。ただ漫然と、ホームステイに参加しても、参加者は言葉も理解できない中で、ホストファミリー宅の生活では時間を持て余し、結局は、自分の部屋で過ごすことが多くなり、日記を書いたり、日本に手紙を書いたり、日本の宿題に追われたりする現実が数多くあります。そして、グループの友達や一緒にいる日本人の仲間と過ごすことに喜びを感じます。もちろん、これは日本から留学する多くの学生や社会人の場合でも同様ではあります。センターは国際理解教育の専門業者として、このことは声を大にして申し上げたいと思います。実際に異文化学習や国際理解学習をするためには、事前にその方法の指導を受け、現場であるホストファミリー宅や学校、また訪問先や研修の場において、それを具体的に実践しなければなりません。センターは、オリエンテーションにおいてその異文化体験学習方法まで指導します。

☒ 期間中、両性のセンター職員が常駐し、問題解決にあたる

ホームステイでは、大なり小なり、必ず、トラブルが発生します。この際、これらのトラブルは引率指導者や現地スタッフ任せではありません。日本のセンター職員が現地に常駐しており、職員も問題解決にあたります。すなわち、日本の主催者が直接問題解決に協力します。特に、参加者が男子であっても、女子であっても、気軽に相談できるように、センター職員は両性の職員が派遣されます。

☒ 期間中の様子は、センターのホームページで公開している

期間中、現地での活動内容を、センターのホームページ上で公開しております。内容は、参加者や現地の先生、引率指導者の現地での生活の様子が分かる写真や動画、日記形式の活動報告を中心として、グループごとにアクセスできるようにしています。アドレスは www.mncc.jp です。

☒ 目的は異文化理解と自立に基づく人材育成

このプログラムの目的は、異文化理解と自立に基づく人材育成です。国際交流は手段であると考えており、目的ではありません。日本を離れ、家族と別れ、異言語下の他人の家庭で生活しながら、自己を見つめ、異文化と自文化を考えるためのプログラムです。

☒ 午前9時から午後4時までスケジュールが組まれている

このプログラムは、午前9時から午後4時までスケジュールが組まれております。授業、社会見学、文化交換会、レクリエーション、終日研修と、アメリカの生活を様々な方面から体験できるようになっています。

☒ オリエンテーション（事前研修会）が充実している

このようなプログラムで最も大切な事は、説明会やオリエンテーションが、どの程度の時間と内容で行われているかということです。このプログラムでは、約3時間かけて説明会が行われています。また、5月末から7月にかけての週末に、合計約15時間のオリエンテーションが組まれています。

☒ ホストファミリーはボランティアによる受入れ

一般的に、ホストファミリーには、日本の下宿と同様、お金をお支払いするものと、ボランティアによる場合の2通りがありますが、このホームステイは基本的にボランティアによるファミリーによって成り立っているプログラムです。但し、受入れのために余分に発生する費用の補助が行われることもあります。

☒ ボランティア活動への参加

期間中、ボランティア活動が計画されています。アメリカを理解する上での重要なキーとなる「ボランティア」を、実際に主体者として自ら体験することによって、ボランティアの真の意味を考えます。

☒ 危機管理の指導を行う

センターでは、異文化の生活を「文化的戦場」として捉えています。すなわち、ホームステイは「文化的戦場」に赴くことであり、異なることを常態と考えます。そのため、参加者への指導の一つに「危機管理」があります。この危機管理のあり方は、センターが独自に作成したものに基づいて、オリエンテーションで行います。

☒ 教育的なプログラムである

決して観光旅行ではありません。参加者は出発までに課題英会話文を利用して学習できます。また、現地での授業は生徒のレベルにあわせて2クラスに分けて行われます。そして、宿題などもホストファミリーと一緒にやるようなものが毎日出されます。

ホームステイを成功させるために

1 ホームステイの成功とは何か ― 参加者が負う責任

「ホームステイの成功とは何か」というテーマは、参加者だけでなく、その保護者の方々にも、事前に、ぜひ考えていただきたいことの一つです。なぜなら、その理念が、ある程度、具体的に明確にされていなければ、また、示されていなければ、プログラムの終了後、その体験が参加者の人生にも活かされることなく、ホームステイが単なる「良い思い出」だけで終わってしまうかもしれないからです。当然、参加者によってこの答えは異なってまいります。この設問を多くの参加者や保護者に尋ねれば、大体、次のような考えに要約することができます。すなわち、参加者がホストファミリーとの交流を深め、親密な関係を築き上げ、異文化を学び、英語力を伸ばして、国際感覚を身につけて帰国できたら、それが成功と呼べる、理想的な体験学習のようです。

確かに、要約されたこれらの考えは、ホームステイの持つ成果を集約しているものではありません。しかし、残念ながら、この考えは参加者側から見られたものであり、受入れ側の視点が全く欠落しております。

ホームステイは、ホテル滞在とは異なり、宿泊先はホストファミリー宅ということになります。ホテルに宿泊する時のホテル側の目的は、「金銭による対価」になりますが、ホームステイにおけるホストファミリーの目的とは、何なのでしょう。特に、センターのホストファミリーは、原則として「ボランティア活動」の一環として、参加者の受入れを行います。ということは、ホストファミリーは、何の目的で、参加者のお世話をされるのでしょうか。

つまり、ホームステイには、参加する側と受入れ側の趣旨と目的という、二面性があります。参加する側が目的を持っているように、受入れ側も目的を持っているということです。ですから、参加者がいかに自分の目的が達成され、プログラムに参加して本当に良かったという感想を持っていたとしても、その参加者の受入れ側である、「ホストファミリー」「プログラム関係者」が、果たして参加者と同様の評価を行ってくれるかという問題があるのです。つまり、参加者側の目的が成就したとしても、それではまだ50%の目的達成であって、受入れ側の目的が達成されて、初めて100%のホームステイの成功という言葉が出てくるのです。

ホストファミリーの目的は、「参加者を自宅に受け入れて、体験的に日本人の考え方や文化を理解する。」というところにあります。その目的のために、皆さんを自宅で受け入れるのです。では、彼らの目的達成のために、何が必要であるかを考えてみてください。そうすると、それは参加者の協力なくしては不可能だということがわかります。いくら彼らが努力しても、受け入れた生徒が、内気で、消極的で、恥ずかしがり屋で、日本の文化や習慣、日本人の考え方などについて話そうとしなければ、また、紹介する姿勢がなければ、彼らの目的が達成することはありえません。すべては、受け入れる生徒の姿勢と行動次第という受身の立場であることがわかります。つまり、参加者にこれらの姿勢が欠落していたら、自分たちのボランティア活動によって得られる達成感というものは半減してしまうのです。ホームステイが単なる観光旅行ではないという一つの理由がここにあります。ホームステイは、ギブアンドテイクであり、ホストファミリーに対して参加者が負う責任というものがあるということです。それは二つあります。一つは、いつも日本の紹介を行おうとする姿勢と実践です。もう一つは、異なることを受け入れようとする姿勢とホストファミリーに対する感謝です。もし、あなたがホームステイに参加しようとしているなら、これを実践することができますか。このプログラムでは、それが問われます。

2 ホームステイを成功させるために

① オリエンテーションの指導を実行すること

センターではオリエンテーション（事前研修会）を2回、合計約15時間実施します。1回目は保護者同伴で、ホームステイ全般にわたる指導を行い、2回目は参加者だけを対象として、グループ活動上の指導とケーススタディを行います。この席上で、徹底した異文化学習の指導と自文化紹介のための方法と、そして、ホームステイにおける学習の仕方や危機管理などを行います。このオリエンテーションの内容を忠実に実行すれば、成果の多い異文化学習が体験できます。なお、参加者が九州以外に居住している場合は、録音CD等で対応します。

② できるだけ英語の勉強をしておくこと

センターでは、申し込まれた方々に暗記用の英会話文が238文ほど掲載されたガイドブックをお渡ししております。ホームステイ期間中に必ず一度は使うという重要な英文ばかりですから、出発までにこれらの英文を覚えておくとう便利です。毎年、英語の勉強をしていない小学生が参加しますが、彼らもこの英文を覚えて参加することによって、十分にホストファミリーとの生活を楽しんでいます。ホームステイに参加するからといって特別に英会話学校に行く必要はありません。この238の暗記用英文（ホームステイイングリッシュ）を全部覚えてしまえばいいのです。そのためには、早く申し込む必要があります。

③ 早くから準備すること

このプログラムは観光旅行ではありません。立派な民間外交の役割を果たしています。ホテルではなく、一般の家庭で生活するのですから、ファミリーは皆さんを日本人の代表としての眼で見ます。ですから事前の準備は大変重要です。早く申し込む必要性は前述の通りですが、英語だけではなく、文化や生活習慣の違い、その国についてなども知っておく必要があります。また同様に、日本のことについても学んでおく必要があります。これらの事は、参加する皆さんが観光ではなく、勉強する目的で行くのだという心構えを持つ意味でも大事なことです。

④ 積極的にトライすること

ホームステイ期間中は、受身の立場で生活してはいけません。受身の生活は観光旅行を意味するものです。他人がしてくれるのを待つのではなく、主体的に生活してください。「～される」のを待つのではなく、「自ら進んでトライする」という気持ちを常に忘れないでください。遠慮してはいけません。引込み思案ではいけません。初めての体験でも、恐れず自主的にやってください。トライする数が増えれば増えるほど、皆さんが体験する数も多くなり、得るものも多くなります。反対に遠慮すればするほど、アメリカでの生活は思い出の少ないものになってしまいます。このプログラムをより有意義なものとするためには、皆さんの積極的なトライなくしては考えられないのです。「考える前にトライすること」、これを実践してください。

⑤ 目的を持つこと

はっきりとした目的意識を持つことは、大変重要です。漫然と参加するのではなく、期間中に必ず成し遂げられるような、目的意識を持つことをお勧めします。例えば、「英語力をつける」という漠然としたものではなく、「毎日一つ新しい英語表現を覚える」というような具体的目標が大切です。また、学習的な目標より、自分の趣味や特技を生かした目標の方が、効果的です。サッカーの好きな人は、サッカーに関する目標を、手芸が趣味の人は、手芸に関する目標を、ハンバーガーの好きな人は、ハンバーガーに関する目標を立てた方が、実践できる可能性が高くなります。期間中に、必ず成し遂げられるような、実感があるものを目的としてください。

⑥ ギブアンドテイクの精神を持つ

先述したように、このホームステイは、基本的にボランティアによるホストファミリーの受入れによって成り立っております。ですから、参加者側と受入れ側の関係は「Give & Take (ギブアンドテイク) の精神」によって成立します。これは、「一人だけが得るのではなく、両者が得たり、与えたりする」精神を意味しています。つまり、参加者はホストファミリーから、「家庭生活の場」を提供されているのですから、ホストファミリーに対して、常に「ギブ(Give)」する気持ち、すなわち、「自分は何をホストファミリーのためにしてあげられるか」という視点が必要です。この気持ちがある限り、ホストファミリーとの生活はうまく行くはずで

⑦ 参加者の自立と親の自立

参加者は、長期間にわたり、日本を離れ、日本の親元を離れ、米国文化の他人の家庭で、英語を使って生活していかなければなりません。悲しくても、寂しくても、悩みがあっても、ホストファミリーの家には、日本語で相談できる人は誰もいません。孤独な生活環境でも、一人でそれを乗り越えていかなければなりません。このプログラムの最も大事なことは、これらの環境の中、一人でやっていくことなのです。そのためには、お申込みいただいてから後も、ご自宅では、自分のことは自分でやっていくという、「自立」した環境で生活されることをお勧めします。保護者の方も同じです。子離れできない保護者のお子様は、一般的に、親離れできないお子様でもあります。このプログラムを良い機会にして、ぜひ、相互依存の関係から脱却していただきたいと思います。

⑧ 「はい」「いいえ」の自己主張

明確に、自分の意思表示ができることは、アメリカ社会の基本です。日本の生活に「はい」か「いいえ」の判断を導入することを、強くお勧めします。日本でできなければ、ホストファミリー宅でも絶対にできません。自分の気持ちを「説明」するのではなく、「はい」「いいえ」、「賛成」「反対」、「正しい」「間違い」などの、明確な判断が必要です。普段の日常生活の中に、自分で判断し、それを意思表示し、その結果責任を自分で負うという環境を持ち込まない限り、いつまでたってもできるようにはなりません。アメリカで家庭生活を送るための、必要最小限の準備の一つです。



募 集 内 容

◆ 研修目的

小学生、中学生、高校生、大学生を対象として、アメリカの家庭で家族の一員として過ごし、市民生活と学校生活の両面を体験しながら、言葉と心のふれあいにより、幅広い視野、国際感覚、語学力、そして自立心の向上を図ろうというものです。

◆ 研修参加資格

- ◆日本国籍を有する小学生（5年生以上）、中学生、高校生、大学生に限る
- ◆心身健康で、自分の身の回りのことを一人でできること（※詳細は、P17のQ13をご参照ください。）
- ◆異文化や英語に関心があり、積極的な意欲のあること
- ◆参加者、保護者とも配布された資料を理解し、センターの指示・決定事項を遵守できること
- ◆参加者、保護者ともプログラムの趣旨を理解していること
- ◆オリエンテーションに参加すること

※出発前に上記研修参加資格に抵触すると判断された場合、センターでは参加をお断りさせていただく場合があります。
※何らかの持病や症状のある方は、申し込まれる前に、必ずセンターへご相談ください。

◆ 研修期間

【中/高/大コース】2020年7月下旬から24日間

【小学生コース】2020年7月下旬から15日間

※日程が合わない場合でも、個人ベースで対応できる場合がありますので、お問い合わせください。

◆ 研修費用と定員

コース	定員	研 修 費 用
中・高・大 24 日 間	300人	548,000円（九州の空港発着）※ 568,000円（那覇空港発着）
小 学 生 15 日 間	30人	528,000円（九州の空港発着）※ 548,000円（那覇空港発着）

※福岡、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島空港からの発着料金です。その他、同一料金で参加できる空港がありますので、お問い合わせください。

◆ 滞在地

アメリカ合衆国（西海岸を中心として、中西部までに亘る選定された地域）

◆ 申込締切日

2020年5月21日（但し、定員になり次第締め切ります。）

◆ 利用航空会社

日本航空、アメリカン航空、全日空、ユナイテッド航空
大韓航空、デルタ航空、エバー航空、中華航空
アジアナ航空、エアカナダ

◆ 研修費用の範囲

◆ 研修費用に含まれるもの

1. 発着地から米国までの往復航空運賃エコノミークラス
2. 米国到着後、ステイ地までの交通費及び帰りの空港までの交通費
3. 期間中の授業料、及び研修教材費
4. 期間中の午後に計画されたプログラムの交通費、施設使用料
5. 終日研修における交通費、入場料見学費
6. 米国受入機関の運営費用
7. 現地準備期間（3月～7月）の諸費用
8. 米国内における団体行動中の費用
9. 米国での現地教師（ティーチャーコーディネーター）の期間中の人件費
10. オリエンテーション、異文化体験報告会費用
11. 往復の旅程中に発生する宿泊費用（食事を除く）
12. 集合から解散までに発生する団体行動中の交通費
13. 引率指導者同行必要経費
14. センター職員同行必要経費

※家庭内での食事は、ホストファミリーの好意で提供されます。

◆ 研修費用に含まれないもの

1. 米国税関申告書作成、携帯品・別送品申告書作成料、電子渡航認証システム（ESTA）代理申告手数料や有効性確認などの費用 9,000円
2. ESTA申請料 1,600円（有効なESTAの所有が確認された場合は必要ありません）
3. パスポート印紙代……所持者は不要
（5年間有効なパスポート印紙代
12才以上-11,000円、12才未満-6,000円
10年間有効なパスポート印紙代16,000円）
4. 米国の出入国通行税、入国審査料、税関審査料、検疫使用料、米国保安料、空港施設使用料 約8,000円
5. 国内外の空港施設使用料や旅客保安サービス料、国際観光旅客税、航空保険特別料金、空港税など 約5,000円
6. 燃油サーチャージ料
（目安：21,000円／2020年1月10日現在）
7. 任意の海外旅行保険料
8. 個人的な小遣い
9. 超過航空受託手荷物料金

※天候などの当社の関与し得ない事由のため、当初のスケジュールと異なり、ホテルに宿泊をしなければならない場合は、宿泊費や食費が別途必要になります。

※燃油サーチャージ料は、燃油原価の高騰に伴い、航空会社が国土交通省に申請し認可されたもので、航空運賃とは異なる付加的な運賃であり、区間によって異なります。一時的なものとして実施されており、区間や航空会社によって料金も流動的です。

◆ 研修管理

添乗員は同行しませんが、引率指導者（プログラムアドバイザー）が国際線出発空港から同行します。期間中は、センター米国事務所内に、センター職員が常駐し、引率指導者と連絡を取り合いながら、適切なスケジュールや活動内容の実施、運営に関する管理、監督を行います。

☑ ホームステイ地の決定

このプログラムの目的は、異文化を実感し、心のふれあいを育てることにあります。そのため、この目的にふさわしい環境の地区を郊外に選定してあります。ホームステイ地は、西海岸を中心として、中西部までに亘る地域で選定されますが、原則として、みなさんの滞在地の選定、及び決定は、性別、学年、県別などの様々な要素を考慮してセンターが行います。

☑ ホストファミリー

ホストファミリーは、各ホームステイ地区のコーディネーターを通じて、日本に関心を持ち、異文化について興味のある家庭の方々に依頼します。ホストファミリーは基本的にボランティアで、皆さんを受入れてくださいます。この善意に応えるように責任ある行動をしてください。特に注意して欲しいことは、お客様という気持ちを捨て、自分でできることは自分でやり、お手伝いなどをしてあげることです。このような気持ちで生活することが、ホストファミリーとの絆をより強めるわけです。なお、ホームステイは原則として一家庭に1人、または2人で滞在します。また、2家庭から受け入れを希望された場合は、前半と後半にわかれて、2家庭に滞在する場合もあります。(詳細は11ページを参照)

☑ ホストファミリーの決まるまで

正式に参加申込みをされますと、センターから正式書類が送られてきます。その中には「ホストファミリーへの手紙」や「ホームステイ申込書」「スナップ写真」など、あなたをできるだけ詳しく紹介するための提出書類があります。これらのものをセンターからアメリカへ送り、各ホストファミリーは、その中から、最も自分の家庭にあった人を選んでいきます。例えば、趣味が一緒だとか、お父さんの職業が同じだとか、そのようないろんな理由で、各ホストファミリーが、どの生徒を自分の家庭でお世話するか決定していきます。ホストファミリーには、2人の生徒を受け入れることを希望している方もいれば、生徒1人の受け入れを希望する方もいます。

☑ 移動手段について

家庭生活を中心とした時間帯においては、ホストファミリー宅の家族の一員として生活しますので、家族とともに外出する際は、必然的に、ホストファミリーが運転する車に同乗する機会が多くなります。毎日の学校への登下校においても、ホストファミリーの送り迎えのお世話になりますし、午後の活動に伴う研修地までの移動も、ホストファミリーの善意によるカープール（相乗り）に依存することになります。さらに、現地の先生方の運転する車に同乗することも常態化するでしょう。幸いにも、過去45年以上に亘り重大事故等は発生していませんが、これらの事実は実績となり得ても、将来の安全を保証するものではありません。肝要なのは、研修生自らが、シートベルトの装着等の危機管理を心がけ、傷害保険に加入するなどして、自分でできる対策は積極的にしておくことが、ホームステイや海外で過ごす際のあるべき姿です。

☑ 為替変動による研修費用の変更について

このプログラムは、2020年1月10日時点の運賃、料金を基準として、研修費用の算出が行われています。研修費用は、航空運賃の改定や円ドル相場の変動に伴い、その変更が起こることがあります。「その他のプログラム条件」で明記されていますように、航空運賃の大幅な改定があった場合は、その増額、減額分が研修費用に反映されます。また、円の対ドル為替は変動相場制ですので、その価格変動は常に起きておりますが、それを反映させることは現実的ではありません。そこで、このプログラムにおきましては、2020年6月20日の円対ドル為替相場のTTSレートを基準値とし、その日のレートが130.00円以上の場合や、90.00円以下の場合は、研修費用を検討し、参加費用の増額、もしくは減額を行う場合があります。

☑ 英語力について

ほとんどの日本人の方々は、小学生と大学生の英語力は、かなり違うと考えています。小学生は学校で英語をあまり勉強したことがないし、大学生は、既に、中学校、高校で6年間も英語を学習しているのだから、相当な英語力の差があると考えるのは、当然のことかもしれません。例えば、ホームステイに参加した小学生と大学生において、本当にそれだけの差を、ホームステイの現場で見ることができるのでしょうか。答えは「No」です。ホームステイでの両者の英語力は、ほとんど変わらないのです。何故でしょうか。

言葉を自由に駆使するためには、「書く」「読む」「話す」「聞く」という4つの能力が必要です。4つの能力のうち、ホームステイ期間中に最も必要なものは、「話す」「聞く」という能力です。ところが、高校生、大学生は、「書く」「読む」という能力はあっても、「話す」「聞く」という能力は、ほとんどありません。「話す」「聞く」という学習は、6年間の英語学習ではほとんどやっていないからです。小学生も、中学生も、高校生も、大学生も、ホームステイにおいては、「話せない」「言っていることがわからない」という状態であり、「話す」「聞く」という方法では、コミュニケーションできないという状態です。ですから、小学生、中学生、高校生、大学生のホームステイでの実際的な会話能力は、ほとんど同じだということです。



研 修 内 容

◆ 研修内容

原則として、1グループを約25人の参加者と日本人引率指導者1人で編成し、このグループ単位で行動します。参加者は指定されたステイ地区で、それぞれのホストファミリーに引きとられ、ホームステイします。ホームステイ期間中は、午前中は授業を受け、午後からはあらゆる活動が準備されています。また、期間中3回（小学生コースは2回）は終日研修があります。週末は、ホストファミリーと、それぞれの家庭で自由時間を過ごします。

◆ ウェルカムパーティー

アメリカ到着後、一両日中に行われるのがウェルカムパーティーです。これはホストファミリーと現地教師であるティーチャーコーディネーターの先生方が中心となつて行う、参加者を歓迎するパーティーです。それぞれのホストファミリーが、食べ物を持ち寄るポットラックという形式で行われ、ゲームなどをして、お互いの親睦を深めます。

◆ 授 業

終日研修日以外の平日は午前中、9時から12時まで3時間、アカデミックセンターで、米国人教師による英語での授業が行われます。カリキュラムはテキストを使い、アメリカの文化や生活習慣・市民生活などについて学び、毎日宿題が出されます。この授業で学んだことが、帰宅後の生活にすぐ利用できるように計画されています。

◆ 社会見学と文化交換会とレクリエーション

毎週、午後（13時～16時）は、社会見学や文化交換会、及び、レクリエーションがあります。社会見学は、授業の一部で、ホームステイ地区の様々な職業の人と接し、アメリカの社会生活について学ぶ絶好の機会となります。午前の授業の中でも、この訪問先が事前に説明され、参加者側からの質問にも応じてくれます。また、ホストファミリーや子供達、地域住民の方々と、日本とアメリカについて互いに学ぶ、文化交換会を開きます。その他、老人ホームや学校などを訪問し、交流を行う様々な活動も計画されます。レクリエーションでは、水泳やバスケットボールなどのスポーツや、ピクニックなどを行います。

◆ ボランティア活動

ホストファミリーや、地域の人々に対して、ボランティア活動を行い、寄付金（Donation）を募り、その基金で、アメリカの子どもたちを日本に招待するジャパンホームステイという活動（※詳細は10ページ参照）を行っています。主なボランティア活動内容は、カーウォッシュ（車洗い）と、ガレージセールです。ガレージセールでは、不要な物や手作りの小物などを持ていきます。

◆ 終日研修

期間中3回（小学生コースは2回）は終日の研修に出かけます。これも授業の一部ですが、社会見学よりさらに遠い所へ行きます。目的地は、歴史的な場所や建造物、及び自然公園などです。

◆ 週 末

土曜日と日曜日の週末は、グループとしての活動はありません。ですから、ホストファミリーと一緒に過ごすことになります。あるファミリーは、この期間を利用してキャン

プに出かけるかもしれませんし、あるファミリーはショッピングに行くかも知れません。また、どこにも出かけず、自宅でゆっくりと休日を過ごすファミリーも数多く見られます。できるだけ、ホストファミリーと行動を共にして、彼らとより親密なつきあいをし、英語や異文化の学習をした方が有意義でしょう。

◆ 引率指導者

引率指導者はプログラムアドバイザー（PA）と呼ばれ、グループのリーダーとして、日本を出発し、日本に帰国するまで、参加者の指導にあたります。現地でも参加者と同じホームステイ地に滞在しており、基本的に、グループの全スケジュールに同行します。主な役目は、参加者の生徒指導であり、カウンセラーであり、プログラム助言者です。決して、参加者の通訳ではありません。

◆ 現地教師

原則として、現地では1グループに2人の米国人教師（ティーチャーコーディネーター、TC）がつき、参加者のお世話をします。午前中は授業を行い、午後の活動や終日研修、ホストファミリーのことも、スケジュールのことも、プログラムに関するあらゆることに、この先生が、引率指導者同様、参加者のために相談にのってくれます。

◆ 南日本カルチャーセンター職員

プログラム期間中は、日本の本社から職員が数名派遣され、南日本カルチャーセンター米国事務所に常駐します。そして、グループの日々の活動状況を収集し、管理、運営を行っています。また、引率指導者と連絡をとりながら、相談やアドバイスをを行います。（詳細は15ページを参照）

◆ サヨナラパーティー

参加者の皆さんが中心となり、ホストファミリーへの感謝の意味をこめて、ホームステイ終盤の夕刻に行われるものです。日本料理を作ったり、歌や踊り、日本の伝統的文化を発表したり、参加者それぞれの趣向とアイデアで、お世話になったホストファミリーや先生をもてなします。

◆ 修了証書

プログラムが終わったら、各先生方の署名入り修了証書が、ひとりひとりに渡されます。

◆ 1週間のスケジュール

TIME DAY	9:00AM		12:00PM		1:00PM		4:00PM	
月	アカデミック		昼食	社会見学		帰宅		
火	センターで授業			文化交換会				
水	終日研修							
木	アカデミック		昼食	レクリエーション				
金	センターで授業			ボランティア活動				
土	週末は授業はなく、ホストファミリーと過ごします。							
日								

※昼食は、ほとんどがサンドウィッチなどのお弁当です。

ボランティア活動

プログラム期間中は、午後の活動としてボランティア活動がスケジュールに組み込まれています。決して受け身の姿勢ではなく、生徒自らが能動的に活動できるという点でも、大変意義のある活動です。なぜなら、ホームステイプログラムに参加する上で、参加者自身が主体的に考え、行動することが、プログラムを成功させるために必要不可欠であり、非常に大切な鍵となるからです。プログラムに参加することで全てが完結しているのではなく、プログラム自体は土台であり、始まりであり、プログラム開始後、参加者自身が主体的に活動することで、その土台はより膨らみ、成長し、充実したものになっていきます。生徒たちが取り組むボランティア活動には、老人ホームを訪問し、施設の方々に日本文化を紹介したり、教会の掃除を行うなどの活動があります。また、期間中に1回、各ステイ地域で、Car Wash（車洗い）やGarage Sale（ガレージセール）などのボランティア活動を行い、寄付金（Donation）を募ります。Car Washでは、参加者たちが自ら看板を作り、呼び込みをし、車の洗車を行います。また、お客として来られたアメリカ人の方々に、この活動の目的を説明するのも参加者が行います。Garage Saleは、日本から不要な物や手作りの物を持って行き、アメリカ人の方々にそれらを販売します。値段をつけるのも参加者であり、商品の説明や値段交渉も参加者自らが行います。これらの活動で得た寄付金で基金を設立し、アメリカの子どもたちを、日本に招待するという奨学制度「ジャパンホームステイ」の骨子が生まれました。特筆すべきは、この原資のほとんどが、日本人生徒のボランティア活動によって支えられているということです。さらに、これまでの参加者たちが帰国した後、使い残したお小遣いなどが寄付されたり、参加者の保護者による寄付なども始まり、それらの活動によって基金の原資が膨らんでいくようになりました。長期間にわたり、このプログラムを支えてきた最大の貢献者は、ホストファミリーであり、彼らの善意なくして参加者の感動はありません。ホームステイで必要なものは「Give & Take」の精神です。この精神が国際交流を支えているわけです。参加者は、「ホストファミリーに何かを期待する前に、彼らのために何をしてあげられるかという姿勢をもつこと」が大切であり、その姿勢を実践するものの一つが、これらのボランティア活動なのです。



MNCCジャパンホームステイ

上記の基金を活用し、2000年以降9回にわたり、21名のアメリカ人奨学生が日本に招待されました。エッセイや動画等の書類審査によって選考された奨学生たちは、日本人のホストファミリーと約2週間の生活を共にし、日本での家庭生活や学校生活を体験します。奨学生たちが、これらの経験を通して、日本の文化や習慣、そして日本人に関する理解をさらに深めることがこの制度の目的です。期間中、奨学生は、主に地域の中学校や高校に通い、クラスメイトとして日本の生徒たちと一緒に学校生活を体験します、先生という立場ではなく、同級生という立場の同年代のアメリカ人奨学生の存在が、日本人生徒にとっても、知的刺激や意欲につながり、異文化を学習する良い機会になることを強く願っています。日本の生徒が学生のボランティア活動によって実現する、相互交流としてのこの制度は、極めて意義深いものがあります。センターのホームページ上（www.mncc.jp）で、このジャパンホームステイに関する内容も公開しておりますので、ご覧ください。また、日本のホストファミリーも随時募集しておりますし、この趣旨にご賛同くださる方からの寄付も受け付けております。



ホストファミリー

このプログラムの参加者は、一般のアメリカ人家庭（ホストファミリー）に滞在し、家族の一員として生活を共にします。ホストファミリーは、基本的にボランティアによるプログラム参加であり、プログラムの趣旨にご賛同いただいた方々であり、現地の地区担当者（ティーチャーコーディネーター）を通して、決定されています。「自由と平等」が合衆国憲法で保障されているアメリカにおいては、ボランティアであるということを除けば、ホストファミリーの決定に、家族の経済力、家族構成、婚姻形態、年齢、人種、民族、宗教などのプライベートな要素は、法律に抵触するために考慮されません。最も重視されることは、彼らがいかにこのプログラムの趣旨を理解し、熱意と情熱と愛情を持って、参加者を受入れようとする姿勢が、あるかということです。

ですから、実際にお世話されるホストファミリーは様々です。定年退職された子供さんのいない老夫婦の家庭があれば、ご夫婦と子供さんが11人もいるような大家族もあるでしょうし、母子家庭や、父子家庭もあれば、ご夫婦と幼い子供のいる家庭、さらには、ご夫婦と小さな子供がいて、さらにお母さんは妊娠数カ月というような事例も過去何回もありました。いずれの場合も、地区担当者が、ホストファミリーとして適切であると判断した上での決定です。例えば、日本で外国からの中学生を受入れるホストファミリーを想定した時、上記の例のような家庭で、ホストファミリーとして受入れを行うということは、あまり考えられないようなことかもしれません。中学生を受入れるのだから、中学生のいる家庭がお世話することが好ましいかもしれないと、相手側のことを考え、遠慮がちに、「私どもは70過ぎた子供のいない老夫婦ではありますが、もし、どなたもホストされる方がいらっしゃらなかったら、いつでもお世話いたしましょう。」というようなお申し出をされるのが常です。それが日本的な考え方であり、日本の文化であり、日本のやり方であり、日本の価値なのです。そして、同様に、アメリカにはアメリカのそれらがあるのです。ですから、日本の常識では考えられないようなことも、異文化であるアメリカでは、価値観の相違から、十分に起こり得ることです。

何故、ボランティアで、全く見ず知らずの外国の生徒を、お世話されるのか、日本人にとっては大変不思議です。アメリカ社会ではボランティア活動を通して、何か社会に貢献しようとする精神があります。ホストファミリーになることもその表れの一つだといえます。実際のホストファミリーに、それらの質問をすれば、次の様な答えが返ってきます。「留学生を通して、日本の文化を学びたい」とか、「自分の子供達に、国際的な感覚を身につけさせたい」「外国人留学生に、アメリカの家庭を学ぶ機会を与えたい」などが一般的に数多く聞かれる意見です。でも、これらの理由の前に、物事を気楽に、楽観的に、挑戦的に考える、好奇心の旺盛な動的国民性がその背景にあります。日本人の用意周到で、真面目に、悲観的に、慎重に考え、結果的に何もしない静的国民性と全く正反対です。ですから、彼らの行動や考え方には、日本人に理解し難いことが数多くあり、このボランティアにしてもその一つといえます。けれども、お互いにほぼ正反対の考え方を持っている国民であるからこそ、お互いの考え方から大いに学べるという、補完的な存在でもあるといえます。

ですから、日本とアメリカでは、家庭における考え方にも、大きな違いがあります。アメリカ人の家庭に行き、そこに滞在することによって、考えさせられることを、皆さん方は数多く発見できると思います。それらを認識した上で、アメリカでの生活をスタートしてください。まず、皆さんに注意して欲しいことは、その家族の一員になりきることです。これがホームステイを円滑に行う上で、最も大事なこともかもしれません。また、アメリカ人は、子供に対する考え方が、日本人とは一般的に異なっています。日本の家庭では、子供中心の家庭生活が営まれて、過保護な環境にあるため、子供の親に対する依存心は高く、その結果、親離れ、子離れができにくく、子供の自立心も育ちにくい傾向があります。一方、アメリカの家庭では、子供に対するしつけには、厳しいものがあり、幼少時より一個人として尊重され、自己主張できる、自主自立のしつけと教育があります。日本の母親は、たとえ仕事を持っていたとしても、家庭のすべての家事は、母親の使命と考え、一手に引き受けている場合が多く見られます。しかし、アメリカでは、母親であり、家族があったとしても、他の男性同様、自分の生きがいや自分自身の向上のために、仕事を持ったり、ボランティア活動に参加したり、大学や大学院に通ったりするなど、一人の人間として社会に参画することはごく自然なことです。母親が家庭を留守にする場合は、父親が子供達の面倒を見たり、家事も家族全員で分担し、協力し合って家庭生活が営まれています。家族の一員として生活する以上、参加者も当然それに協力していく必要があります。日本の子供達は身の回りのことを、母親に頼る傾向がありますが、アメリカの価値観では全く相容れないばかりでなく、その考えには全く否定的です。つまり、「自分のことは自分でする」ということが、アメリカ社会の大原則となるわけです。この大原則を中心として家庭生活は動いています。各家庭には、「ファミリーールール」というものがあります。それは、共同生活である、家庭生活がスムーズに営まれるように、お互いの分担や協力内容、守りごとを取り決めたものです。皆さんもそれを早く知り、家族の一員として行動してください。



皆さんが、ホストファミリーを通して学びたいのであれば、様々な彼らの活動に積極的に参加することです。日曜日には家族と一緒に教会に行ったり、教会で催される行事に参加したり、家族の週末の計画や活動に、興味を持って同行したり、食事の後のだんらんには進んで入っていったりすることです。英語が分からないからという理由で、すべて引込み思案にならないことです。ホストファミリーは、皆さん方を通して日本の国、日本人の考え方、日本人の習慣、日本人の生活などを知りたがっているわけですから、皆さんもそれに応えられるようにしてください。何事も積極的にトライすることによって、ホストファミリーとのより一層の深い絆が生まれると共に、アメリカの生活習慣、文化、アメリカ人の行動様式、考え方などが、様々な体験によって得られるはずです。

スケジュール表

このスケジュールは大体のひな型です。月曜日から金曜日まで午前中はアカデミックセンターで授業を受け、午後は社会見学や、ボランティア、レクリエーションなどがあります。また、期間中に3回（小学生コースは2回）終日研修が計画されています。土曜日と日曜日は自由で、終日ホストファミリーと過ごします。中・高・大学生コースは、下記のようなスケジュールで全行程24日間です。なお、実際のものは、2回目のオリエンテーション会場でお渡します。

1日目	午前中に九州各県を出発して成田空港へ。夕刻、成田空港を出発し、約9時間の飛行時間を経て空路アメリカへ。時差の関係で到着は同日。空港では、現地でお世話してくださる先生が出迎え、バスでステイ地へ。アカデミックセンターに到着後、ホストファミリーと対面し、各家庭へ。	15日目	午前-英語の授業。（アメリカの祝祭日について。） 午後-アメリカの代表的な行事であるイースターや感謝祭、クリスマスなどの行事について、ホストファミリーによるデモンストレーションが行われる。日本の代表的な祝祭日や行事も紹介して、お互いの文化交流を行う。事前に準備をしておこう。
2日目	午前-オリエンテーション。ホームステイ上の注意点等の説明を先生から受ける。最初の授業では簡単な挨拶や自己紹介など。今日のお弁当は、ホストマザーが作ってくれたサンドウィッチと果物、ジュースなど。 午後-市内散策。郵便局、銀行、消防署、警察署、市役所などを訪問し、説明を受ける。下調べも忘れずに。 夕刻-ウェルカムパーティー。ホストファミリーの手作りの料理によるポットラック（食べ物持ち寄り）パーティー。ゲームやホストファミリーとの歓談で楽しい時間を過ごす。たくさんの人たちと出会える絶好の機会。積極的に話しかけて、仲良くなろう。	16日目	朝から午後のボランティア活動の準備で、カーウォッシュ（洗車）のための看板を作ったり、ガレージセールの値札や商品の紹介文を作ったりする。午後は、カーウォッシュとガレージセールを行う。日本から持ってきた不用品や手作りの品などを売ったり、車を洗ったりして、その収益金をアメリカの子どもたちを日本に招待するための基金に充てる。（MNCCジャパンホームステイ P.10）
3日目	土曜日、日曜日はそれぞれのホストファミリーと共に過ごす。ホストファミリーとの過ごし方は十人十色。共有する時間を楽しもう。	17日目	ホストファミリーと過ごす最後の週末。この週末は、お世話になったホストファミリーへ自分が何をしてあげられるか考え、それを実行しよう。
4日目		18日目	
5日目	午前-英語の授業。（日常生活で使う簡単な会話の表現、俗語や慣用語について。）今日のお弁当は自分で作ったサンドウィッチ。日本の昼食と比べよう。 午後-レクリエーション。ホストファミリーも交えて、地域のプールで水泳をする。	19日目	カリフォルニア州の州都サクラメントへ終日研修。古き時代を残す歴史的な街を散策したり、州の政治の中心地である州議事堂などの見学。そこで働く人からの説明を受ける。下調べをして、たくさん質問しよう。
6日目	午前-英語の授業。（アメリカのお金や買い物での英会話、物価の違いについて。） 午後-スーパーマーケットへ行き、実際に買い物の勉強。アメリカの製品と日本の製品との価格の違いや、品物について比較してみよう。	20日目	午前-英語の授業。（アメリカの公共施設について。） 午後-地域の中学校を訪問。文化交流会の中で友達を作ったり、授業を見学したりする。アメリカの学校生活をしっかり観察して、日本の授業や学校の様子と違う点をたくさん発見しよう。アメリカの中学校で友達になった生徒とも交流を続けていこう。
7日目	世界的に有名な観光地であるサンフランシスコへ終日研修。ゴールデンゲートブリッジ、ピア39、フィッシャーマンズワーフなどを見学。	21日目	午前-最後の授業。プログラムの評価レポートを作成。プログラムの最後にホストファミリーに渡すプレゼントを制作したり、パーティー会場の飾りつけを作ったりして、サヨナラパーティーの準備をする。 午後-地域の公園へ歩いていき、ピクニックをする。みんなで様々なゲームをしたり、軽いスポーツをして過ごす。ホストファミリーの子どもたちも参加。
8日目	午前-英語の授業。（アメリカ人の仕事について。） 午後-地域の新聞社を訪問。プログラムやグループの紹介と、期間中のボランティア活動に関しての紹介を記事にしてもらったり、取材を受けたりする。	22日目	午前-サヨナラパーティーの会場作りと出し物の練習。全員合唱のリハーサルをしたり、個人の出し物の練習をしたりする。 午後-グループに分かれて、パーティーで振舞う日本料理を作ったり、会場の飾りつけをしたりする。 夕刻-サヨナラパーティー。歌や踊り、ゲーム、日本の伝統芸能などを、感謝の気持ちを込めて、ホストファミリーや先生方に披露する。プログラムの集大成であるサヨナラパーティーを全員の力で成功させよう。TCの先生から修了証書頂く。
9日目	午前-英語の授業。（アメリカにおけるボランティア活動について、日本との違いを考えてみよう。） 午後-ボランティア活動。貧しい人のために食べ物や衣類などを配布する施設で、食べ物を袋に詰めるお手伝いをする。	23日目	早朝、アカデミックセンターでホストファミリーと別れ、バスで空港へ。現地の先生は空港まで見送り。搭乗手続きを済ませ、出国手続きをし、約10時間の飛行時間を経て、空路日本へ。機内で感想文を書く。
10日目	それぞれのホストファミリーと自由に過ごす週末。キャンプに行ったり、湖に行ったり、楽しい思い出づくりを。	24日目	時差の関係で日本到着は翌日。成田空港到着後、入国手続きを終え、バスで羽田空港へ移動し、各県空港へ。各県空港到着後、解散。全てのスケジュールが終了。
11日目			
12日目	午前-英語の授業。（アメリカの食べ物と食事のマナーについて、日本と何が違うか発見しよう。） 午後-地域の博物館を見学し、説明を受ける。ステイ地の町の成り立ちや歴史を学ぶ。		
13日目	午前-英語の授業。（アメリカの教育について。） 午後-地域の小学校を訪問。折り紙などの遊びや日本の伝統文化を紹介しながら、文化交流会を行う。アメリカの学校を訪問することにより、日本との学校教育の違いや授業の様子、学校での過ごし方を垣間見ることができる。		
14日目	コロンビア歴史公園へ終日研修。1850年代のゴールドラッシュの頃に栄えていた街で、当時の社会生活や歴史的背景を学習する。また、駄馬車に乗ったり、砂金取りを体験したり、ゴールドラッシュ時代を疑似体験する。		

申 込 方 法

◆ 申込方法

お申し込みには「参加申込書」と「参加申込金」の2点が必要です。

- ◆ 参加申込書 巻末の申込書にご記入ください。
- ◆ 参加申込金 5万円（研修費の一部に充当します。）

以上の2点を南日本カルチャーセンターに現金書留でご郵送ください。申込金は銀行振り込みでも構いません。到着次第、ガイドブッケー式をお送りします。

◆ 申込先及び振込先

◆ 申込先

〒890-0056 鹿児島市下荒田3丁目16番19号
株式会社 南日本カルチャーセンター

◆ 振込先

三井住友銀行	鹿児島支店	普通口座	828282
肥後銀行	鹿児島支店	普通口座	1055554
南日本銀行	本店	普通口座	230800
鹿児島銀行	鴨池支店	普通口座	3138706
沖縄銀行	本店	普通口座	1278721
郵便振替口座			02010-8-32878

◆ 口座名 (株)南日本(ミナミニホン)カルチャーセンター

※必ず参加者名で送金してください。

※残金は出発日前日から起算してさかのぼり、21日目にあたる日より前にお支払いください。

◆ 参加取消し

参加者のご都合によりお取消しになる場合は、次の取消料をお支払い頂きます。

研修開始前日から起算してさかのぼり 40日前から31日前	50,000円
研修開始前日から起算してさかのぼり 30日前から3日前	研修費用の20%
研修開始前々日より研修開始当日の研修開始前	研修費用の50%
研修開始後以降、又は無連絡不参加	研修費用の100%

◆ お申し込みから出発まで

① お申し込み

参加申込書と参加申込金5万円をお送りください。センターより受諾書や正式書類等が送られ、契約の成立となります。



② 事前学習

参加者はガイドブックに沿って、英文を覚えたり、日米に関する下調べをしてください。



③ 正式書類の提出

正式書類に基づいて、グループ編成やホストファミリーの決定が行われますので、指定された期日までにご提出ください。



④ 渡航手続き

有効な旅券（パスポート）をお持ちでない方は、旅券取得の手続きを行ってください。米国の税関申告書作成やESTA申請手続き等は、センターが行います。



⑤ 残金の支払い

研修費用のご案内を受け取られてから、残金をお支払いください。



⑥ オリエンテーション

ホームステイの学習の仕方、生活上の注意、準備するものなどを説明します。日時・会場は事前にご案内します。



⑦ 出発

7月下旬から数日に亘り、グループごとに出発します。



⑧ 帰国

帰国して数週間内に、異文化体験報告会が開かれます。

その他のプログラム条件

下記は、旅行業法等に基づき、参加者に交付する取引条件説明書面および契約書面の一部です。参加申込みに際してはパンフレットを十分ご確認のうえ、本プログラムの内容をご理解いただきますようお願いいたします。このプログラムは、2020年1月10日の運賃・料金を基準としております。

◆ 募集型企画旅行契約

このプログラムは、南日本カルチャーセンター（観光庁長官登録旅行業第1355号）（以下「当社」という。）が旅行企画・募集し実施するプログラムであり、このプログラムの参加者（参加者が未成年の場合は、その保護者）は、当社と募集型企画旅行契約（以下「契約」という。）を締結することになります。契約の内容・条件は、パンフレットに記載されている条件のほか、本プログラム条件説明書、出発前にお渡しする確定書面及び、当社の「旅行業約款」（以下「募集型約款」という。）によります。

という。）によります。当社は、参加者が当社の定めるプログラム日程に従って、運送・宿泊機関等の提供する運送、宿泊その他のプログラムに関するサービス（以下「プログラムサービス」という。）の提供を受けることができるように手配し、旅程管理することを引き受けます。

◆ 旅券・査証について

このプログラムには、帰国日まで有効な旅券（パスポート）が必要です。

◆契約書面および確定書面

契約書面とは、パンフレット、本プログラム条件書、受諾書をいい、確定書面とはプログラム開始前にお渡しする研修日程表と、集合解散の案内書のことをいいます。

◆研修地に「海外危険情報」が発出された際の催行中止について

お申込後、プログラムの目的地に「海外危険情報」が発出された場合は、当社は、契約の内容を変更し又は解除することがあります。外務省「海外危険情報」が「渡航の是非を検討してください」以上の危険情報を発出した場合は、当社はプログラムの催行を中止する場合があります。その場合は、プログラム費用を全額返金します。ただし、当社が安全に対し適切な措置が取られると判断して、プログラムを催行する場合があります。この場合に参加者がプログラム参加を取りやめられると、当社は所定の取消料をいただきます。

◆契約内容・代金の変更

当社は、天災地変、戦乱、暴動、運送・宿泊機関等のサービス提供の中止、官公署の命令、当初の運行計画によらない運送サービスの提供（遅延、目的地空港の変更等）その他の当社の関与し得ない事由が生じた場合、プログラム日程、サービスの内容その他の契約内容を変更することがあります。また、その変更に伴い、プログラム費用を変更することがあります。さらに、著しい経済情勢の変動により、通常予想される程度を大幅を超えて、利用する運送機関の運賃・料金の改定があった場合には、プログラム費用を変更することがあります。増額の場合は、プログラム開始日の前日から起算してさかのぼって15日目に当たる日より前に参加者にその旨を通知します。

◆参加者による契約の解除（取消料のかかる場合）

参加者は、所定の取消料を支払い、契約を解除することができます。当社の責任とならないローン、渡航手続き等の事由によるお取消しの場合も、所定の取消料をいただきます。お取消しの連絡は、当社営業時間〔9時～17時（土・日・祝日休業）〕のみお受けします。

◆参加者による契約の解除（取消料のかからない場合）

下記の場合は、取消料はいただきません。

- ① 当社によって契約内容が変更されたとき。ただし、その変更が募集型約款第29条に掲げるものその他の重要なものであるときに限る。
- ② プログラム費用が増額されたとき。
- ③ 当社が参加者に対してプログラム開始日の1週間前までに確定書面を交付しなかったとき。
- ④ 当社の責に帰すべき事由により、当初のプログラム日程通りのプログラム実施が不可能になったとき。

◆当社による契約の解除（プログラム開始前）

当社は次の場合は、プログラム開始前に、契約を解除することができます。

- ① 参加者が当社があらかじめ明示した性別、年齢、資格その他の参加者の条件を満たしていないことが判明したとき。
- ② 参加者が病気その他の事由により、当該プログラムに耐えられないと認められるとき。
- ③ 参加者が他の参加者に迷惑を及ぼし、又は団体行動の円滑な実施を妨げるおそれがあると認められるとき。
- ④ 参加者が契約内容に関し、合理的な範囲を超える負担を求めたとき。
- ⑤ 参加者の数がパンフレットに記載した最少催行人員に達しなかったとき。この場合、プログラム開始日の前日から起算してさかのぼって23日目（ピーク時は33日目）に当たる日より前に、プログラムを中止する旨を参加者に通知します
- ⑥ 天災地変、戦乱、暴動、運送・宿泊機関等のサービス提供の中止、官公署の命令その他の当社の関与し得ない事由により、パンフレットに記載したプログラム日程に従ったプログラムの安全かつ円滑な実施が不可能となり、又は不可能となるおそれが極めて大きいとき。
- ⑦ プログラム費用をパンフレットに記載された期日までにお支払いいただけないとき。この場合、参加者は当社に対し、所定の取消料に相当する違約料を支払わなければなりません。

◆当社による契約の解除（プログラム開始後）

当社は次の場合は、プログラム開始後であっても、契約を解除することができます。

- ① 参加者が病気その他の事由によりプログラムの継続に耐えられないとき。

- ② 参加者がプログラムを安全かつ円滑に実施するための引率者の指示に従わないなど団体行動の規律を乱し、当該プログラムの安全かつ円滑な実施を妨げるとき。

- ③ 天災地変、戦乱、暴動、運送・宿泊機関等のサービス提供の中止、官公署の命令、その他の当社の関与し得ない事由により、プログラムの継続が不可能になったとき。

当社がプログラム開始後に契約を解除したときは、当社と参加者の間の契約関係は、将来に向かってのみ消滅します。この場合は、参加者が既に提供を受けたプログラムサービスに関する当社の債務については、有効な弁済がなされたものとします。

◆当社の責任

当社は、契約の履行に当たって、当社又は当社が手配を代行させた者（以下「手配代行者」という）が故意又は過失により参加者に損害を与えたときは、その損害を賠償いたします。但し、損害発生の日から起算して2年以内に当社に対して通知があったときに限ります。手荷物に係する賠償限度額は、参加者1名につき15万円を限度として賠償します。また、参加者が天災地変、戦乱、暴動、運送機関等のサービス提供の中止、官公署の命令その他の当社又は手配代行者の関与し得ない事由により損害を被ったときは、当社はその損害を賠償する責任を負いません。

◆特別補償

当社は、参加者がプログラム参加中に、急激かつ偶然な外来の事故により生命、身体又は手荷物の上に被った一定の損害について、募集型約款特別補償規定により、死亡補償金として2,500万円、入院見舞金として入院日数により4万円～40万円、通院見舞金として通院日数により2万円～10万円、携行品にかかる損害補償金（15万円を限度、ただし、一個又は一対についての補償限度は10万円）を支払います。

◆旅程保証

当社は、プログラムに下記の変更が行われた場合は、募集型約款の規定により、その変更の内容に応じてプログラム費用の1%～5%に相当する額の変更補償金を支払います。但し、変更補償金の額は、プログラム費用の15%を限度とします。また、一つの契約についての変更補償金の額が1,000円未満の場合は、変更補償金は支払いません。

- ① プログラム開始日又は終了日の変更
- ② プログラムの目的地の変更
- ③ 運送機関の種類又は会社名の変更

当社は上記の契約内容の変更が生じた原因が以下にある場合は、変更補償金を支払いません。

- ① 天災地変 ② 戦乱 ③ 暴動 ④ 官公署の命令 ⑤ 欠航、不通、休業等の運送機関等のサービス提供の中止 ⑥ 遅延、運送スケジュール変更等の当初の運行計画によらない運送サービスの提供 ⑦ 参加者の生命又は身体の安全確保のため必要な措置

◆参加者の責任

参加者の故意又は過失により当社が損害を被ったときは、当該参加者は損害を賠償しなければなりません。参加者は、当社から提供される情報を活用し、パンフレットに記載された参加者の権利・義務その他の契約内容について理解するように努めなければなりません。

◆個人情報の取扱について

当社は、お申込みの際に提出された申込書に記載された個人情報について、参加者との間の連絡のために利用させていただくほか、運送・宿泊機関等の提供するサービスの手配、及びそれらのサービスの受領のための手続きに必要な範囲内で利用します。このほか、当社の取り扱い商品のご案内、プログラム参加後のご意見やご感想の提供のお願い、アンケートのお願い、統計資料の作成に、参加者の個人情報を利用させていただくことがあります。また、センター職員や関係者等が撮影した画像や動画を、当社ホームページや印刷物等に、本人が特定されない内容で掲載させていただくことがあります。

◆燃油サーチャージについて

燃油サーチャージは、プログラム費用には含まれておりません。利用航空会社により必要となる場合がありますので、プログラム費用と併せてお支払いください。参加者が燃油サーチャージの徴収を理由に契約を解除される場合は、所定の取消料を申し受けます。

◆募集型企画旅行契約約款について

この条件に定めのない事項は、当社旅行業約款（募集型企画旅行契約の部）によります。当社旅行業約款をご希望の方は当社にご請求ください。

管理運営態勢

① 期間中の現地運営本部設置

プログラム期間中は、日本でのオリエンテーション等で対応にあたっているセンター職員が数名派遣され、南日本カルチャーセンター米国事務所に現地運営本部を設置し、そこに常駐しております。そして、毎日のグループ活動状況を収集し、安全対策上においても、管理運営上においても、現地での指示命令系統に、時間を必要としない環境で、管理、運営が行われています。派遣された職員の通常の仕事は、各ホームステイ地区に滞在する引率指導者と連絡を密にして、相談やアドバイスをを行い、日本の本社とグループ活動現場の間に立つことです。現地の運営本部からの連絡事項は日本の本社を通して行われますが、万一、参加者に生命の危機を伴う緊急事態が発生した場合は、現地本部のセンター職員が窓口となり、直接日本の保護者に連絡するという態勢がとられることもあります。ちなみに、そのような事態が発生したことは、過去46年間で一度もありません。

② センター職員の定期巡回とカウンセリング

ホームステイという異文化生活では、恒常的に、参加者が様々な問題や悩み、摩擦や困難を抱えることになります。それは当然のことであり、その体験があるからこそ、異文化生活に価値があるといえます。但し、それは参加者に対する適切な指導が行われることが前提です。引率指導者は、参加者の日常的生活指導を行います。異文化摩擦を原因とする問題を解決するプロではありません。そこで、プログラム期間中は、日本から派遣されたセンター職員が、定期的に参加者のステイ地に赴き、参加者や引率指導者の相談に乗り、アドバイスをしたり、カウンセリング業務や問題解決に協力していきます。そのため、派遣されるセンター職員は異文化摩擦や異文化理解、国際理解を経験した者で、トレーニングを積んだ者がその職責を担当することとなります。

さらに、長期間の異文化生活を送る際に、引率指導者が男性であるか、女性であるかということは、参加者にとって意外と重要な問題であると考えられる保護者は多いようです。先述しました通り、参加者に対する適切な指導や助言は大変重要であり、それを効果的に実施するためには、指導者と参加者の相性や性による差異なども含めて、非常に繊細で、微妙な内容であることも多いとセンターでは認識しています。例えば実際に、引率指導者は男性で、女子の参加者は相談したくても、相手が男性だから相談できないこととか、男子の参加者が女性の引率指導者には、どうしても距離を感じるなどが起きております。このことを踏まえて、センターからは男性職員と女性職員の双方が派遣され、参加者が相談できないような問題が無いように、極力注意を払った中でプログラムが運営されていきます。

③ ホームページ上で、活動状況を常時公開

プログラム期間中、参加者の文化交流会の様子や授業内容、午後からの活動状況を撮影した記録写真を映像ファイルで、参加者や引率指導者、現地指導教師の様子を動画ファイルで、また、引率指導者の活動報告書をテキストファイルにして、様々な情報を現地から本社に送り、下記のホームページ上で、保護者や関係者のために、公開する環境を確立しております。また、連絡事項や活動内容の周辺にある情報提供、事前の準備やもっと詳細なプログラムの内容など、あらゆる情報をホームページで公開しています。URL : www.mncc.jp

④ 病気やケガや有事の対応

病気やケガをした場合、次のような対応がとられます。まず、現地教師と引率指導者の間で、病院へ行く必要性が判断され、必要な場合は、「現地教師」「引率指導者」「ホストファミリー」のいずれかが必ず参加者に同行します。1回の治療で処置が終わるような場合の治療費は、参加者か同行者が現金で支払い、その数日後には、センター職員がその費用を支払者に立て替えて支払い、センター職員が保険会社に保険の手続き処理を行います。参加者や同行者が立て替えられないような金額の場合、センター職員が保険会社と直接交渉します。このようにして、病気やケガが発生しても、現地米国人職員だけではなく、日本から派遣されたセンター職員がその処理にあたります。また、有事の場合に対応できるように、主催者名で参加者全員を対象とした必要最低限の保険に加入しており、その補償額は下記のとおりです。但し、アメリカの医療費は大変高額ですので、各自で任意の海外保険にも必ず加入されることを強くお勧めします。(任意保険につきましては、正式書類と一緒にご案内します)

死亡・後遺障害（特別補償2,500万円を含む）	5,000万円
疾病死亡	2,000万円
賠償責任	10,000万円
携行品（免責3,000円）	15万円

⑤ 安全管理、危機管理の事前学習会での指導

事故や危機を予見したり、その発生を回避することを目的として、安全管理、危機管理の指導を、下記の12項目にわたって実施します。また、過去の参加者達が実際に遭遇したトラブルを、ケーススタディとして指導します。

- テロや暴動への対処
- 事件や事故の回避
- 交通規則の違い
- 緊急事態の自己管理
- 性に関する危機管理
- 禁止事項について
- 自然災害の対応
- 健康管理
- 食事管理
- 金銭管理方法
- 銃社会の危機管理
- その他の危機管理

Questions and Answers

Q01: クラブ活動の試合の日程と重なって、スケジュールが合わないのですが。

A01: 出発日は、原則的に7月下旬から数日に亘り、グループごとに出発していきます。センター職員が現地に常駐していますので、ご質問のようなスケジュールの折合いがつかない場合でも、このプログラムは対応できる場合があります。例えば、本来のグループの出発日から遅れて、他のグループと出発して現地で合流したり、少し早めに他のグループと帰国したりすることも可能です。いろいろなスケジュールや日程の関係などで、出発日や帰国日に不都合が生じた時でも、対応することができる場合がありますので、事前に、担当者にご相談ください。

Q02: 英会話に自信がありません。

A02: コミュニケーションで、最も便利で、効果的なものは「言語」です。当然、我々には母国語というものがあり、その道具を使ってコミュニケーションを図ります。ところが、ホームステイに参加する場合、異言語であるため、その道具を所有していません。だから、コミュニケーションがスムーズにいかないという事実はありますが、全然コミュニケーションができないことはありません。それは、コミュニケーションでは「非言語」によるものが数多くあり、我々は「言語」以上に「非言語」によって多くの情報を得ているからです。例えば、電話を利用してコミュニケーションする場合、そこには「言語」しか存在せず、「非言語」による情報はありません。だから、数多くの誤解が電話でのコミュニケーションで発生するのです。ホームステイの場合、現場に参加者はいます。すなわち、ホストファミリーを始めとするアメリカの人々と、時間と空間を共有していますので、相手に理解しようという気持ちがあり、こちらが伝えたいという意味がある限り、コミュニケーションは可能なのです。ですから、オリエンテーションで、コミュニケーション方法を具体的に指導します。

Q03: 観光旅行とホームステイの違いは何ですか。

A03: 基本的に、「ホームステイは観光旅行ではない」という言い方をしますが、それは、厳密な表現ではありません。何故ならば、実際にはホームステイという滞在方法ではあるけれど、実質的に観光旅行であるというのは、いくらでも存在するからです。すなわち、ホームステイという形を変えた観光旅行であり、ホームステイとは、生徒のための海外旅行というような現状があります。理念的に、「ホームステイは観光旅行であってはならない」という表現が適切ではありますが、残念ながら、数多くのホームステイプログラムにおいて、現実には程遠いものがあります。観光旅行とホームステイの違いを端的に述べるなら、「娯楽性と教育性」の違いでしょう。観光旅行はレジャーであり、ホームステイは学習なのですが、その線引きがあいまいな状態になっております。センターのホームステイは、教育性を追求する異文化理解研修プログラムですので、娯楽性の持つ「楽しさ」「面白さ」「気楽さ」より、教育性の持つ「厳しさ」「困難さ」「大変さ」に満ちていることをご理解いただきたいと思います。

Q04: アメリカ以外にプログラムはないのですか。

A04: 結論から申し上げますと、このプログラムでは、アメ

リカしか取り扱っておりません。でも、それにはセンターなりの大きな理由があります。ホームステイは、子ども達に信じがたいほどの多大な影響を与えます。ですから、初めてホームステイする場合、その対象国選定は、大変重要なことと考えております。ご存知の通り、アメリカは世界のリーダーシップを取っている国の一つであることは、誰もが認めるところでしょう。政治においても、経済、教育、産業、科学でも、世界の中心地であり、アメリカ抜きで世界を考えることは、現実的ではありません。もちろん、人種や民族問題、犯罪や治安の問題、環境問題、移民問題など、数多くの国内問題をも内包しつつ、世界で唯一の超大国としての地位を築いています。一方、日本は、経済においてはGDPベースで、世界第3位の経済大国であり、確かな先端技術を有する先進国家であります。そのような国に生まれ育った日本の若者たちが、初めて海外に赴き、その国の家庭生活や市民生活、社会生活を通して、何かを学び、体験し、刺激を受け、動機づけを期待するのであれば、日本以上の先進国家に行くことの必要性を、センターでは優先順位が一番目に考えているわけです。

Q05: 一人で参加する勇気がありません。

A05: プログラムに参加するためには、二つの要件が必要です。それは、「親が許可すること」「本人に参加する意志があること」です。簡単な要件ですが、親が許可しているのに本人が希望しない場合や、本人が希望しているのに親が許可しない場合が、非常に多いのです。基本的に、前者は「男子生徒」に多く、後者は「女子生徒」に多く見られるケースです。つまり、男子生徒の場合は、親は参加させようとしても、本人は行きたがりません。反面、女子生徒は行きたがりますが、親が許可しません。一般論として、親は何故、参加させたいのでしょうか。プログラムの参加に、あなたの両親は何を求めているのでしょうか。おそらく、その必要性を感じているからでしょう。親として、プログラム参加は、子どもであるあなたに必要なことと考えているのでしょうか。もし、あなたに参加する勇気がないとするなら、あなたの親は、その勇気をあなたに求めているのかもしれない。参加するという勇気は、自己との戦いです。これまでのすべての参加者は、この戦いの中で、不安になり、弱気になりながらも、一歩前に進む決断を下したのです。でも、その陰には、一歩前に進む勇気がなくて、後悔した人がたくさんいることをセンター職員は知っております。戦わずして後悔するより、たとえ戦って惨敗したとしても、そこに意義を見つけて前進する、そんなしたたかで、向上的な考え方をしたいと思います。

Q06: 何年生でホームステイするのがベストでしょうか。

A06: このプログラムの中核にあり、根底に流れているテーマは、「自立」です。その意味では、より早くから参加することで、親からの自立に目覚め、客観的な視点を培うことに役立ちます。このことはプログラムの総論的な成果として指摘できます。次に、参加年齢による効率性を論じた場合、絶対的に、どの学年で参加することが最も得策であるという判断は、極めて困難であり、相対性があります。例えば、小学生での参加は、「国際理解に関する動機付け」としての意味合いが濃く、中学生での参加は、「英語学

習への動機付け」と位置づけられ、基本的に15歳以下のプログラム参加は、一言で言えば「きっかけ作り」でしょう。次に、高校生、大学生の参加は、実際に英語という言葉を使って、「異文化理解」や「英語力の向上」という実質的内容を伴うものへ、その参加目的は変化していきます。ですから、どの学年で参加すべきかとお考えになる前に、何の目的でホームステイに参加しようとしているのかという視点で、お考えになることをお勧めいたします。

Q07: オリエンテーションの内容を説明してください。

A07: オリエンテーションは2回行われます。1回目は5月から6月の休日に、参加者と保護者を対象に九州各県で行われ、内容は、「異文化理解について」「ホームステイの学習の仕方」「危機管理」「出発準備」などを行います。2回目は6月下旬から7月中旬の休日に、参加者のみを対象に九州各県で行われ、「集合解散などの説明」「ステイ地について」、異文化摩擦の「ケーススタディ」「規則や注意事項」「グループ学習」などについての説明や打ち合わせなどが行われます。さらに、帰国後は、「異文化体験報告会」が実施され、数多くの国際交流体験者が陥りやすい問題点を指摘し、帰国後の「家庭生活でのあり方」「学校生活でのあり方」などの指導を行ってまいります。これら一連の内容は、この貴重な国際交流プログラムの成果を高めるために、極めて大切なことです。

Q08: アレルギーがあるのですが、大丈夫でしょうか。

A08: アレルギーには、食物アレルギーや動物アレルギー、金属アレルギー、気管支喘息、小児喘息、じんましん等、様々な種類があるようです。例えば、ほとんどの一般的な米国家庭では、猫や犬を始めとする何らかのペットを飼っていますので、動物アレルギーを持つ人は、その症状が発生するかもしれません。また、食物アレルギーのある人は、自分で特定された食材を管理できるでしょうか。もちろん、事前にホストファミリーにアレルギーのある食材を連絡することで、そこでの食生活はある程度協力してもらえそうですが、日中の活動中にレストランやファーストフード店で食べる食材を、言葉の不自由な未成年の参加者たちが管理できるかと言えば、大変なことかもしれません。結局、ホームステイ期間中の私生活の部分は、参加者の自己管理に委ねられることとなります。アレルギーの症状は個々に異なるでしょうから、各自がその症状の内容や程度や状態を勘案して、判断されるしかありません。また、症状の内容によっては、現地受入機関から医師の診断書の携行を求められたり、ホストファミリーを手配するための別途費用を請求される場合があります。但し、アレルギーによるアナフィラキシー、及びアナフィラキシーショック症状がある方は、参加資格に抵触することになります。(Q13を参照)

Q09: 学校の宿題を持っていくことができますか。

A09: 宿題を持って行っても構いません。でも、実際に宿題の時間を確保するのは、難しいのが現実のようです。もちろん、往復の飛行機の中や、自宅で夜寝る前にやることは物理的には可能でしょうが、実際に参加した先輩たちは、宿題をやる時間は足りなかったと言っています。また、教材関係の本は意外と重たいので、国際線受託手荷物の重量制限も考慮しながら、必要に応じてご判断ください。

Q10: 携帯電話を持参することができますか。

A10: このプログラムでは、携帯電話を持参することは、禁止されています。最大の理由は、ホストファミリ

ー宅で、携帯電話を使ってSNSやネットサーフィンに一人向き合う時間は、ホストファミリーとのコミュニケーションを拒否していると捉えられるからです。そして、その中毒性から、長期の大学留学ですら、英語習得力が低下しているのも、スマートフォンで過ごす時間との関連性が指摘されています。結局、携帯電話と向き合う時間は、日本文化圏の中で生活していることと変わりはなく、プログラムの本質的な目的や趣旨にも影響しかねないことです。そのため、本プログラムでは携帯電話やスマートフォン等の通信機器の持参を禁止しているのです。

Q11: ホームステイ地を希望できますか。

A11: 原則として、ホームステイ地は希望できません。なぜなら、このプログラムは観光旅行ではなく、異文化学習を目的とするホームステイプログラムであり、観光旅行のように、希望の訪問先へ行くということが目的ではないからです。センターでは、参加者の性別、学年などを考慮して、適正配置しております。もし、特別な理由で、ステイ地を希望されることがありましたら、担当者にご相談ください。

Q12: 現地での授業はどのような内容ですか。

A12: 終日研修日を除く、平日の午前中は、毎日、正午までアカデミックセンターで授業が行われます。この授業は、現地の先生が担当し、引率指導者は助言程度で、オブザーバーとして授業に参加されます。授業の内容は、英語で行われますが、英会話を教えるのではなく、毎日の家庭生活に役立つようなアメリカの文化や習慣の紹介が、テキストとして配布され、その内容にそって行われます。例えば、郵便物の出し方、電話のかけ方、お金の説明、アメリカの家庭生活の役割分担についてなどです。また、発声練習や文型の応用、英語の歌やゲームなども取り入れられております。さらに、授業の最後には、毎日、宿題が出され、その内容は、ホストファミリーと一緒にやらなければならないようなものになっています。そのねらいは、宿題を通して、生徒にホストファミリーと会話や交流をさせようというところにあります。

Q13: 参加資格に関する規定には、どのようなものがありますか？

A13: ① 参加者が生死にかかわる健康上の問題を抱えている場合、及びその可能性がある場合
② 参加者が国際理解や国際交流活動に主体的に参加するのが困難と判断される場合、及びその可能性がある場合
③ 参加者に日常生活上の自立が見られない場合、及び他者の支援や特別な配慮を必要とする場合

上記が、参加資格に関する、センター及び現地受入機関の判断基準になります。主に未成年である参加者を、保護者が側にいない他国においてお世話する以上、生命に関わるようなアレルギーや持病、または何らかの障害をお持ちの場合は、慎重に対応せざるを得ません。例えば、食物アレルギーや動物アレルギーなどにおいて、アナフィラキシーショックなどの重大な症状を引き起こす場合は、参加をお断りしなければなりません。また、てんかん、躁うつ病、自傷行為、重度の喘息が見られる方も、現地受入機関の指示により参加できません。なぜなら、このプログラムが、基本的にボランティアの家庭に滞在しながら、異文化を学習し、国際交流を行うということ、また、参加者が家庭生活や地域社会で活動する際に、日本の文化や価値を紹介したり、逆に、同様のものを米国から吸収する等の国際理解の

活動を行うこと、そして、お世話してくださるホストファミリーの家庭において、日常生活上での自己管理ができることなどが、必須となってくるからです。何か参加者の参加資格上のこと等でご心配な点がございましたら、申し込まれる前に、必ずセンターにご相談ください。

Q14: 治安は良いのでしょうか。

A14: ステイ地の選択については、センターの46年間のホームステイ実績を活かして、特に考慮されています。参加者が安全、かつ快適に生活できるよう、郊外にステイ地を設けてあります。しかし、この質問の中で最も大事なことは、「危機管理の指導」にあるとセンターでは考えております。自国が極めて安全な環境であるがゆえに、我々日本人は、海外でも同様の感覚で過ごしてしまいがちです。そのような意味と、そのような姿勢でいる限りは、治安が良いと答えられる海外は、現存しないのかもしれないかもしれません。このような視点に立つて、センターでは「危機管理の指導」に徹底したオリエンテーションを開いております。特に、これまで参加した先輩達が引きおこしたトラブルをケーススタディとして学習し、どう行動すべきであったかを指導します。また、期間中はセンターの日本人スタッフが常駐しており、異文化摩擦のカウンセラーとして問題解決にあたるなど、万全の態勢で臨んでおります。過去46年間にわたり、1万6千人を超える参加者が何ら事故、事件に巻き込まれることなく、プログラムが運営され続けていることも、このような理由に基づくものと考えております。

Q15: ホームシックは、どうすればいいのでしょうか。

A15: ホームシックといっても、人それぞれに症状は異なります。単なる、「日本が恋しい」「日本食が食べたい」「お母さんに会いたい」というような気持ちは、ほとんどの参加者が期間中に一度は思うもので、むしろ自然なことですので、この程度で心配することは何もありません。ところが、これらのものが、「食事がまったく喉を通らない」「ふさぎこんで、無口になったり、問題行動を起こそうとしたりする」「泣きわめく」などと、段階的に異なる症状に発展していくことが見られます。このような症状が見られるようになった場合、センター職員がカウンセラーとして対応してまいります。通常は、時間の経過とともに症状は軽減していきますが、これが長引くようだと、異なる問題に発展することがあります。つまり、泣きじゃくり、ふさぎ込んで、話をしようとしないう参加者の有様に、周囲の者は振り回され、お世話する側が閉口してしまい、ホストファミリー宅を出るという事態が起こるのです。このような重度の事態になると、途中帰国という判断も現実になります。ホームシックを治す薬はありません。唯一、異文化に適應する努力だけです。

Q16: おこづかいはいくら必要ですか。

A16: このプログラムは研修です。従って無駄使いは厳に慎んでください。高額のお金の所持はトラブルの原因となります。以上のことから、センターでは下記の金額を最高額としておりますので厳守してください。

小学生 250ドル、中学生 300ドル
高校生・大学生 400ドル

Q17: 期間中、現地の様子がわかりますか。

A17: ホームステイ期間中、センターでは現地の様子を、センターのホームページ上で公開しております。グループ活動の様子を日記形式で報告し、写真もグループごとに、掲載いたします。また、引率指導者や

現地の先生、参加者の様子などもグループごとに動画ファイルにして、日本の保護者や関係者の皆様をご覧いただけるようにしてあります。昨年のもは、現在も公開中ですので、ご参考までにご覧ください。
URL: www.mncc.jp

Q18: 申込み後、どのような準備をしたらいいのですか。

A18: 申し込み手続きをされてから、皆さんがやらなければならないのは日米に関する事前学習や英語の勉強です。申し込み後、センターからガイドブックが送られてきますが、それを利用することで、日米について下調べがしやすいようになっています。また、皆さんがホームステイ期間中、必要と思われる238の英会話を掲載してあります。もちろん、発音例を録音したCDもお渡しします。出発までにこの238文を丸暗記するよう心がけてください。特別、英会話学校に通う必要はありません。なお、研修準備や、おみやげ・旅行用品などに関しては、オリエンテーション（事前研修会）を開き、その際に詳細を説明しますので、それまでは、日米に関する事前学習や英語の勉強を除いては、一切準備されるものではありません。但し、申し込み後にセンターから渡される正式書類は、指定された期日までに必ず提出してください。また、旅券（パスポート）申請はなるべく早めにお済ませください。

Q19: ホームステイ期間中、いろいろなトラブルが発生すると聞きましたが、本当ですか。

A19: 本当です。カルチャーショックやホームシック、病気や怪我など、トラブルは大なり、小なり、必ず発生します。ですから、異文化学習においては、「始めに問題ありき」という考え方が、センターにはあります。センター職員が異文化交流アドバイザーとして常駐するのもそのためです。でも、このトラブルを恐れるより、トラブルから何を学習するかという姿勢の方が大切です。つまり、ホームステイに参加するということは、この異文化ならではの違いに対して、どう対応するかなのです。その違いに対して戸惑いながらも、刺激を受け、好奇心が生まれ、さらなる興味を抱けば、そこには知的向上心や自主性、問題解決力が生まれます。参加者がこの方向へと流れていけば、トラブルを自覚することはありません。ところが、もし、その違いに戸惑い、閉口し、不快に感じ、排他的になれば、異文化での生活には苦痛が伴いトラブルとなり、周囲の方々を巻き込んでいきます。そしてその時が、センター職員の出番なのです。それでも、不測の事態として、万が一、持病や体調の急激な悪化、異文化生活への過度の不適應など、様々な症状を理由に、参加者の安全上、プログラムを続けることが困難な状態が起こった場合、早期に帰国するという対応がとられる場合があります。この場合、あらかじめ出発前に予定された旅程を変更して、新たに発生した費用は、保護者のご負担となることをご承知ください。

Q20: 詳しくプログラムの説明を受けたいのですが。

A20: 福岡県以外の九州各県で、プログラム説明会を行っています。説明会では、各県担当者が約3時間かけて、プログラムの詳細について説明します。しかし、説明会の日程にご都合が合わないなどの場合は、担当者が個別に電話などで、ご説明させていただきますので、お気軽にご連絡ください。また、このプログラムの契約に関し、担当者からの説明にご不明な点がございましたら、ご遠慮なく裏表紙に記載の総合旅行業務取扱管理者にご質問ください。総合旅行業務取扱管理者とは、契約取引の責任者です。

引 率 指 導 録

長崎県長崎市立土井首中学校開成分校教諭 片山 志保

7月31日（水）

T CのYvonne先生とRachel先生がお迎えにきてくださいました。予定より1時間早い到着で、Yvonne先生からの「Good morning!」の大きな一言で、リラックスムードから一気に緊張!! いよいよPort Orchardへ出発です。バスに乗り込むと、初めて見るアメリカ・シアトルの建物、フリーウェイなど、写真を撮っている子もいました。1時間もしないうちに、Port Orchardのスタディーセンターへ到着しました。今日は、オリエンテーションということもあり、全員が1つの部屋に集められました。最初に、IDカードの作成をし、その後早速、宿題の説明がありました。1人でするものではなく、ホストファミリーに質問をして、その答えを書いてくるような宿題です。午後は、Ticket Awardの説明から始まりました。これは、宿題をちゃんとやってきたり、フィールドトリップで時間通りに戻ってきたりすると、チケットが増えていきます。その一方で、授業中に日本語を使ったりすると、どんどんそのチケットが減っていくそうです。帰国前までのクラスで3位以内に入ると、豪華賞品をもらえるそうなので、クラスにも集中して取り組みますね。その後、ホームステイをする際の注意事項を聞き、建物内を簡単に見て回りました。そんなこんなで、あっという間に15時。いよいよホストファミリーが続々と迎えにきました。アメリカ式の挨拶に戸惑う生徒たち。生徒みんな緊張していたと思いますが、ホストファミリーも緊張していたと思います。この一度の出会いが、一生の宝になるはず。明日、どんな話をしてくれるのか、私もワクワクしています。

8月2日（金）

午前の前半は、テキストを使っている授業を中心に、日本人が得意とする「l(エル)」と「r(アール)」の発音練習、発音が違うと意味が変わる単語の紹介、英語の早口ことばなどの練習をしました。みんな真剣に、初めて知る単語の意味をメモ帳に書き取っていました。午後からは、学校近くのボウリング場へ歩いて行きました。ホストファミリーの方々も数名参加されていて、盛り上がりました。一旦ステイ先に戻り、Welcome Partyがある公園へ18時に集合です。それぞれの家庭が1品持ち寄りのポットラックパーティーでした。ピザやサラダ、チキンにおにぎり、たくさんありすぎて食べきれない! 生徒たちも大満足でした。食べ終わった後に、みんなで大きな円になって、英語で生徒とホストファミリーの自己紹介をしました。また、レクリエーションでスイカ割りをしました。最初に、Americanが目隠しをして、3回まわり、生徒たちが指示を出します。「Right!」「Left!」など、英語が飛び交っていました。一通り終わると、逆になって、生徒たちがスイカを割ります。そこでは、「Forward!」や「Back!」など、日本人には聞き慣れない英語が出てくるので、目隠しをされている生徒たちはどっちへ動いたらいいのかわかりませんが、そこは優しく周りが支えてくれます。なんだかいい感じのコミュニケーション。たくさんホストファミリーに愛されていることに気づいた1日でした。

8月6日（火）

「ボランティアデー」ということで、退役軍人の老人ホームを訪れました。日本の老人ホームと比べると、明るくて、開放感がありました。玄関には、きれいなタペストリーが飾られており、きれいでした。この老人ホームにいらっしゃる方々は車いすに乘られている方や耳が遠い方もいらっしゃるので、生徒たちも大きな声で話さなければなりません。最初はたどたどしく、無言で折り紙を折り始めましたが、少しずつお互いに、自然と会話できるようになりました。なかには、日本から持ってきていた写真を見せたり、カードゲームをしたり、簡単な英語でコミュニケーションを上手くとりとていて、見ていたこちらが感心しました。Yvonne先生から、「ピアノがあるので、弾ける生徒がいたら弾いて、歌も歌いましょう」となり、「旅立ちの日に」と「ふるさと」の1番を歌いました。初めてとは思えないくらい、大きな声で歌ってくれて、拍手でした。スタディーセンターに着いて、ランチタイムです。今日のランチから、数名の生徒と個人面接を始めました。「アメリカは楽しいか?」とか「日本に帰国して、自分の学校でこの経験をどうやって他の人に伝えていくつもりか?」など、単なる24日間の研修で終わらせるのではなく、この経験はこれから続くことを意識しながらの面接にしたいと考えています。

8月7日（水）

午前中は2つのグループに分かれて、昨日の授業の続きを行いました。最初はJournalでした。お題は、「What 4 things are most important in your life? (あなたの人生の中で最も大切なもの4つは何ですか?)」。

1番多かった答えは「family (家族)」。その他に多かったのは、friends (友だち) やpet (ペット)、好きな歌手やスポーツをするなど、いろいろな答えを書いていました。自分の意見を短時間で書けるようになってきています。その後、新しい単語を10個発表する時間でしたが、今回は少し発表の形式が変わっていました。今までのように、知った単語と意味を発表するのではなく、単語を使って、英文を作成するというものでした。午後からは、市役所と警察署を訪れました。市役所では、Mayor (市長さん) が説明をしてくださり、実際の議会の雰囲気を経験しました。警察署は、市役所内にあり、ほぼ隣の部屋というような感じでした。案内してくれた警察官のアマダさんは、とても笑顔が素敵で、日本にこんなフレンドリーな警察官いるかな? など考えてしまいました。子どもたちも、たくさん英語で質問をしていました。

8月12日（金）

今日のJournalのお題は、「アメリカと日本の英語の授業の違いについて」です。「No dictionary」の指示があり、結構みんな苦戦していました。それでも、自分の意見をしっかり持っている子は、「アメリカではホワイトボードで授業するが、日本は黒板」「アメリカの授業はゲームが多いが、日本の授業は常に勉強」というような意見を書いていました。なかなかいい視点ですね。次にNew Wordsチェックです。今日は、自分が知った新しい英単語を使って、物語を作成することをしました。架空の物語でもいいということで、これも結構難しかったですが、みんな黙々と書き上げます。午後からは地元の高校訪問です。正式な高校の名前は「South Kitsap High School」。キャンパスは3つあるそうです。印象に残ったのは、Wall Art (壁画) が至るところにありました。学生たちが許可を得て、高学年になると描けるそうなのですが、日本では普通できません。さすがアメリカだなと感じました。体育館も2つ、食堂も広くて4グループに分かれて食べにくそうです。生徒が運営するニュースのブースやビデオルーム、劇場なんかもありました。凄さをこのレポートでは表現できないくらいです。

8月15日（木）

アメリカ最後のDay tripの日。出発してから約1時間で、ワシントン州会議事堂に到着しました。敷地が広く、噴水などもありました。外側から見ても、ドーム型の建物が印象的でした。日本ではまず見たことがないくらいの迫力です。ここから約1時間、ツアーのような感じで、議事堂の中を見学しました。私が感動したのは、シャンデリアやランプです。全て、宝石で有名なティファニー製。中学生のなかには、ティファニーというブランドがピンとこなかったみたいです。議事堂の中にあるランプは全部で485個。総額を考えると、耳から煙が出そうです。また、床や壁などは全て大理石でできています。使用されている大理石はイタリア製とドイツ製。ホールの真ん中はコンサートや結婚式などにも使えるそうです。日本をしてくださった方の話によると、ワシントン州の議員には、日本人もいて、裁判官や弁護士で活躍する日本人もワシントン州には多いそうです。ツアーが終わった後は、Gift Shopに立ち寄りました。The Americaと言われるようなお土産がたくさんありました。星条旗やステッカー、マグカップ、ぬいぐるみなど、ワシントン州にいるなど感じられるようなグッズがあって、レジには長い列ができました。レジで買う姿もたくましくなり、小銭もすっかり計算して出せるようになっていきます。議事堂を出る時には、もう12時になっていて、私含め「お腹すいた!」という状態でした。バスで、タコマモールに到着。まずは、フードコートにほとんどの子が移動してランチです。アメリカって、フードコートでいろんな国の料理が食べられるので感動です! その後は、思い思いに欲しいものを買っていました。あっという間に明日は金曜日。泣いても笑っても、来週には帰国です。悔いが残らないように1日1日を大切に過ごしてほしいです! お世話になったホストファミリーにどんな恩返しができるか、考える日々にしてほしいです。

8月16日（金）

午前中は保育園訪問です。赤や青、黄色の椅子や棚、壁にもたくさん絵が飾られた教室で、園児とご対面! お互いに緊張した面持ちです。Yvonne先生から、「1人の園児に1人研修生が担当するように」と指示され、それぞれの子どもたちの間に研修生たちが座りました。まずは自己紹介。園児は2~6歳くらいの子たちです。なかなか心を開いてくれない園児や泣きだしてしまう園児などいましたが、だんだん打ち解けてくると、一緒に折り紙で紙飛行機や風船を作ったあげたり、園児の名前を漢字で書いてあげたりしました。その後は外で遊びました。サッカーをしたり、追いかけたり。ずっと園児を抱っこしている研修生もいました。色鮮やかな、大きな丸い布を使って、同じ動きをしたり、中にボールを入れて遊んだりもしました。研修生も園児も笑っていて楽しそう! 一通り遊び終わって、お互いの緊張がほぐれたところで、園児たちから歌のプレゼント。研修生たちも日本語で「幸せなら手をたたこう」と歌うと、園児たちは英語バージョンで歌ってくれました。言葉は違っても、音楽が一緒なら心は通じます!

8月19日（月）

今日はさよならパーティー。17時半頃から、続々とホストファミリーがスタディーセンターに集まり出しました。ホストファミリーが来ると、研修生たちが指定された席にホストファミリーを連れていきます。もう家族の一員なので息もピッタリだし、英語で会話もして笑ったりして、初日の緊張感はどこにもありません。まずは、研修生たちが作った料理を取りにいきました。たくさん作ったものの、生姜焼きはすぐに無くなり、ジャガイモと玉ねぎが入った味噌汁も無くなりました。肉じゃがも大鍋で作ったり、白ご飯も20合炊いたけど完食。一通り食事が終わるとプログラムのスタートです。拍手あり、笑いあり、ホストファミリーたちもTryあり! 練習をほとんどしていないのに、みんなが努力したんだな、というのがよく分かる内容でした。生徒たちが自分たちでここまで立派に披露し、やり遂げました。最後は研修生たちが作ったカードとタイルを渡して、お開きとなりました。この時は抱き合ったり、感謝の気持ちを述べたりして、ホストファミリーも研修生たちの笑顔も素敵でした。明日が、いよいよアメリカラストです。

引率を終えて

大分県別府市立青山中学校教諭 吉賀 美香

今回の引率を終えて、今思うことは「この経験をさせてもらってよかった」この一言に尽きます。出国の日、福岡空港で初めて24人の生徒たち全員と顔を合わせました。心配そうな表情で子供たちを見送るご家族を見て、責任の重さを感じたことを覚えています。Oak Harborでの生活は毎日がドラマチックでした。子供たちにとっては全てが「New」で、その向き合い方も、慣れるまでにかかる時間も人それぞれ。逃げ場のない異国の地で、自分らしく生活することは本当に難しかったと思います。英語を話すことよりもまず、英語を聞き取ることができない辛さ。「日本に帰ったら、リスニング力をつけたい」そこがファーストステップかもしれません。耳が英語に慣れ始めた頃、今度は「寂しさ」との闘いが始まりました。何を問われているのか、なんとなく理解できるようになってきたものの、自分の気持ちを100%伝えることができないもどかしさと、作り笑顔でその場をしのぐことしかできない悲しさ。日記の内容も上がったり下がったり。気持ちに左右されます。ホストファミリーも色々な方がいました。想像通りだった人、想像とは違った人、食べ物や口が合わない人、生活の仕方があまりにも違いすぎて、気持ちが追いつかない人、言葉の壁に加えて文化も考えも違う家庭で生活することの難しさをそれぞれが感じていました。そんな時、いつも側にいたのが「チームOak Harbor」の仲間でした。同じ困難を共有する彼らは、一緒にいると自然に笑顔になりました。お互いがお互いの支えになっていることが、私にはよく分かりました。一人じゃないと気付いた頃楽しいことが増えました。Tryすることの大切さや面白さに気付いたのもこの頃です。私はこのホームステイを通して「感じて、考えて、行動して欲しい」と伝えてきました。あらゆる感情を味わいながら考え、行動した後に結果がついてくる。その結果が自信や学びを与えてくれると信じているからです。子供たちはたくさんの感情を受け入れながら、自分で考え、動き続けてきました。その結果、いつの間にか言葉の壁を越え、周りの気持ちも動かしました。お別れの日、ホストファミリーの涙がその証拠です。子供たちが変わっていく姿を一番近くで見ることができた私は、本当にいい経験をさせてもらったとしか言いようがありません。

熊本県宇土市立網田中学校教諭 夏原 秀一

今回の研修は、私にとって初めてのアメリカ訪問でした。こんなに英語漬けの日々は人生初の経験でした。このようなことを20代で経験できていればよかったなというのが正直な感想です。というのも仕事を始めて20年、日常に追われ、仕事の忙しさを言い訳に、自分の英語力を高める努力を怠っていたからです。アメリカで何度後悔したか分かりません。研修生の多くがそうだと思いますが、自分の伝えたいことが言葉にならないことを私もかなりの場面で遭遇しました。それどころか、何気ない会話の中で相手を打つことすらままなりません。その時に沸き起こる「とても悔しくて惨めな感覚」は日本ではなかなか味わうことができません。また、自分の生まれ育った国や地域のことをもっともっと知り、それを英語で伝えることができるようになろうと思います。日本のように普段英語を使わなくても苦勞することなく暮らしていける環境では、高いモチベーションを保ちながら、英語を勉強するのはとても大変です。外国語の勉強は、本当に薄い紙を毎日一枚ずつ重ね、ある一定の時間が経過した後で、力がついていたことを実感できるものです。ですから、毎日少しずつ楽しんで長く続けることが大事だと思います。そして何より大切なのは、間違いを恐れないことです。研修生の皆さんも自分に合った学習方法でこれからも英語の勉強を楽しんで欲しいです。

沖縄県今帰仁村立今帰仁小学校教諭 具志 朝菜

「言語力よりもコミュニケーション力」、研修を通して私自身が強く感じたことです。もちろん相手と意思疎通ができる言語力があるに越したことはないですが、人と人をつなぐものは言葉だけではないと再認識させられたからです。むしろ言葉が不自由だからこそ、相手とコミュニケーションを図るにはもっと他の何かに頼らないといけなくなります。それに気づかせてくれたのは22名の生徒やTC、ホストファミリーでした。「ポスターを作って留学生を迎える」「12歳の子が留学生のスーツケースを2階の部屋まで運ぶ」「挨拶の時に必ず相手の目を見る」「微笑む」「自分から動く」「やるべきことは丁寧にやる」「興味を示す」どれも言葉はなくとも、思いが相手の心に伝わります。その小さな一つ一つを積み重ねていくと、相手と自分の関係を近づけることができます。言葉が通じない、自分の要求を言えない、言えたとしても直球すぎて相手への配慮に欠けた言い方になり誤解をうける、きっとプログラム中に歯がゆい思いをした生徒がほとんどだったと思います。でもその中だからこそ、ホストの言動やグループのメンバーの行動に救われたり、支えられたりしたはず。言葉に頼らないコミュニケーション力がいかに大切か考えさせられました。彼らの姿を見ていて、目の前にいる生徒たちにつけさせたい力が、より明確になりました。生徒それぞれの心の片隅に秘めるものが生まれたり、小さな灯がついたりして、自分のことが客観的に見えたり、新しい自分を知ったり、人生に影響を与える体験をした子もいるでしょう。彼らの今後の成長が楽しみです。

宮崎県宮崎市立東大宮中学校教諭 新名 潤一

私はよく生徒の滞っているホストファミリーの方々に、子どもたちの様子を聞いた。授業や活動以外での様子を知りたいと思ったからだ。すると決まって、「Good!」という言葉が返ってきた。ケーススタディで学んだことや、このプログラムの目的を理解し、行動に移そうとしたからではないだろうか。それは、相手を思いやり、自分の主張は伝え、ギブアンドテイクよりも、ギブアンドギブくらいの精神で臨もうとする一人一人の気持ちの表れではないだろうか。彼らは、平日はリビングで団らんし、土日は一緒にウィークエンドを楽しんだ。また、日本料理を知ってもらうために日本で覚え準備し、キッチンを使わせてもらい料理した。生徒たちの努力も一入だったと思う。私も生徒たちから学ぶことがたくさんあった。お世話になった皆さんに感謝し、今後の生活の糧にしたい。

鹿児島県鹿児島市立伊敷中学校教諭 村上 奈菜絵

この3週間を通して多くの貴重な体験をさせていただきました。正直に言うと、最初はSonoraという町の名前も聞いたことがありませんでした。インターネットで調べてもほとんど情報がなく不安があったのも事実です。しかし、いざ行ってみると、人が温かく、1850年代の趣深く歴史を感じる街並みが広がる静かな町でした。町中で日本人と会うことはなく、会話は全て英語です。研修生たちは出身の町も学校の規模も英語力もそれぞれ異なり、最初はとても心配しました。しかし、毎日の英語の授業やホストファミリーとの時間を経て、最初の心配が嘘のように英語で楽しそうに話をしているではありませんか。時にはジェスチャーを使ったり、紙に書いてみたり、色々な方法でコミュニケーションを取ろうとする姿勢に感動しました。2週目を過ぎ、町に出かけると、多くの方々が「あなたの生徒と会ったよ。」と声をかけてくれるようになりました。研修生一人一人がたくさんの経験をして成長している姿が本当に嬉しかったです。また、私自身も英語を学び、話しをすることでコミュニティーが一気に広がり多くの人と関わりを持つことができました。同じ時間を共有しお互いが笑顔で過ごした時間というのは、言葉や文化の壁を越えてかけがえのない体験になると思います。

私の小日記

7/29(月)	昨日到着した時より、ホストファミリーにも慣れ、楽しく遊ぶことができた。また、英語にも少しだけ慣れた。アメリカの生活の様子も少し分かり、家に帰った後、ホストシスターと一緒にTake offという飛行機ゲームで遊んだ。ルールが分からなくて17歳のお姉ちゃんが教えてくれた。アメリカの人は親切で優しいと思った。ホストファミリーにも少しずつ慣れてきたので、本当の家族だと思って、接していききたい。あつてるか分からない言葉もどんどん言っていきたい。黙っておくとファミリーも困るので、何かしら言ってみようと思う。私にとっても良い経験になるので、それを成功させたい。そして、学んだことをメモしたり、頭に残すなどして、日本に帰って、たくさん話を聞かせてあげたい。まだ始まったばかりだけど、これからどんどん積極的に話して、仲良くなり、信頼関係を深めていこうと思う。
7/30(火)	学校から帰ってから、ホストマザーに「手紙を出したい。」と言ったら、郵便局に連れて行ってくれた。そこで切手を買ひ、日本の家族と友達に手紙を送ることが出来たので、とても嬉しかった。その後、妹のブレナちゃんと庭でチョークで絵を描いて遊んだ。日本の「けんけんぱ」という遊びを教えた。お姉ちゃんのクオエちゃんは、ものすごく絵が上手で、感動した。自分がいつの間にかホストファミリーに慣れていて、びっくりした。最初は恥ずかしさと不安で、なかなか英語で話せなかったけど、今は話せるようになった。例えば、「Can I use table?」と聞くことができて、私の目標である「会話をする」が達成できたので、嬉しかった。少しずつ小さな目標を立てて、それを一つずつ達成するためにいろんなことに挑戦していこうと思う。
7/31(水)	午後からボランティア活動で車洗いをした。たくさんさんの車が来てくれたので嬉しかった。前半は洗車係で、腕が痛くなった。後半は「Car Wash」と書いてあるポスターを、通る車に見せた。無視されることも多かったけど、何台かは笑顔で手を振ってくれたり、洗車に来てくれたりして、嬉しかった。ボランティア活動の後は、ファミリーと海に行った。私は海に入らず、潜って泳いだ。日本と同じでしょっぱかった。ブレナちゃんと一緒に高い台から飛び込み、楽しかった。最初は自分から話しかけることがなかったけど、日が経つにつれ、自分から話しかけるようになったので、嬉しかった。
8/2(金)	朝起きたら、マザーに「今日は学校に行かないよ。」と言われ、ホストシスターと一緒にパンケーキを作った後、みんなでどこかの農場に行った。そこでたくさん遊ばせてもらった。昼ご飯に食べたホットドッグは一口目はおいしかったけど、何口か食べると「オエッ」ってなった。アメリカの食べ物は重たいということが分かった。家に帰ってからは、ホストマザーに教えてもらいながら、宿題をした。そこでアメリカの学校等について教えてもらった。だからその後、私が住んでいる佐賀県のパネルフレットを見せたり、写真で自分の住んでいる町の様子や家を見せたりした。明日は土曜日で週末なので、とても楽しみだ。アメリカに来て1日目や2日目は早く日本に帰りたいと思っていたけれど、今は帰りたいと思っていない。それだけ楽しめているから、とても良いと思う。これからも英語をなるべく話していきたい。
8/5(月)	午後からは、老人ホームでおばあちゃんに折り紙を教えた。教えるのはとても難しかったが、完成すると、すごく喜んでくれたので良かった。私は手先が不器用だと思っていたけれど、アメリカの人は自分以上に不器用だと思った。家に帰ってからホストシスターに鶴を教えた。羽を広げたら、喜んで顔をしてくれた。ほとんど話をしなくても完成することができたので良かった。また何か教えてあげたい。その後ビーチに連れて行ってくれた。とても綺麗な海だった。貝殻も拾った。その時、暑かったので余計に海の水が冷たく感じて、気持ち良かった。あと2週間楽しみたい。
8/8(木)	今日は終日研修でシアトルに行った。初めて行った感想は、人が沢山いたことだ。そして色んな人がいたので、少しびっくりした。街中で演奏してお金を貰っている人が結構いたり、ホームレスの人がいたりした。でも何で家がなくなったのかな?と不思議に思った。私は、ななはちゃんとさえちゃんと行動し、最初は、世界初のスタバに行った。行列ができていたけれど、世界初に惹かれて並んだ。帰ったら、自慢したい。約1時

佐賀県多久市立東原産舎中央校8年 原田 彩心

8/8(木)	間かけてGetした飲み物はまじでまじで、おいしかった!はしゃぎたくなる位だった。とても幸せな気分だった。そのあとは、いろいろなお店を回った。その中で雑貨屋さんみたいな所があったので、行ってみた。そこで3人お揃いでキーホルダーを買った。大事にしたい。そして、家族のお土産も少しだけ買うことが出来たのでよかった。そろそろお土産も買い始めようと思った。今思ったけれど、すごく時間が経つのが早いと思った。多分時を越えた日付だけ、先に飛んだ感じがする。本当に、あと10日しかないので、びっくりだし、残りの時間を楽しみたい。そして少しでも多く英語を話して、力を上げたい。
8/11(日)	先週と同じで朝は教会に行ったら、昨日と同じメンバーでArt Festivalに行った。沢山の芸術作品があった。その中の1つで、絵のポスターを売っている所があり、お店の人が、「日本へのお土産として、1つどれか選んでいいよ。」と言ってくれた。しかも値段も\$20で、まあまあ高かったので、嬉しかった。家に持って帰ったら、この事を話したい。夜はめっちゃご馳走があった!!すごく大きなチキンがあつて、日本では見たことがなかったの、びっくりして、写真を撮った。鶏肉だったので、重くなく、美味しかった。私は7年生のころは、英語が好きだったけれど、8年生になって、英語が分からなくなり、嫌いになっていた。でも、アメリカに来て、また英語が好きになった。もっともっと英語力を高めて、ペラペラに話したいな!と思っている。日本語以外で会話が出来ることが、本当に素晴らしいと思う。だから、将来でもいいので、それを実現させたい!
8/12(月)	午後の活動では「Thank you gift」として、自分の気持ちを沢山込めて、カードを書くことができた。普段は、いつも絵は適当に描くけれど、今日は真剣に描いた。感謝の気持ちを伝えられたら嬉しい。そして、全然文章の書き方は分からないけれど、辞書と友達の助けをかりて、お礼の手紙を書いて、お別れの時、頑張って読みたい。さよならパーティーの料理の出し物では、私はオムライスとお団子の担当だ。オムライスはうまく作れるか自信がないけれど、他の2人と協力して何とか完成させたい。お腹いっぱいになるように食べてほしい。ファミリーや先生方に、本当に感謝の気持ちを伝えたい。最初はとっても不安で、ちょっと怖かったけれど、優しいホストファミリーの方たちのおかげで本当に楽しむことができた。そして、いつの間にか不安というものは何処かに飛んでいっていた!
8/13(火)	終日研修で、マイクロソフト社とスノコルミー滝に行った。マイクロソフトでは凄いペンを買うことが出来た。その他にもコップとか水筒とかあつて、いいなと思ったら、もの凄く高かったの、買うのをやめた。日本の家族や友達に、お土産や買い物が出来たので良かった。そしてまたアイスクリームを食べた。めっちゃ美味しかった。アメリカの食べ物は美味しい物は本当に美味しいけれど、美味しくない物は本当に美味しくないと感じた。スノコルミー滝は、とても大きくて、凄い迫力があった。滝の近くは涼しそうだった。あと5日間しかないのがすごく悲しい。もっともっとホストファミリーと過ごしたいし、もっとアメリカのことを知りたいと思う。でも、楽しんでるから時間が経つのが、早いなと思う。日本に帰っても、ホストファミリーとネットを通じて話したい!この3週間は人生最高のものになった!
8/15(木)	今日は、クラスでハロウィンパーティーを体験した。みんな凄い衣装やなと思った。先生が車から降りてきた時、誰か分からず、本当に知らない人だと思った。先生と分かるまで、5~6秒かかった!その後、少し授業をした後、ハロウィンパーティーに移った。ハロウィンパーティーでは、とても楽しむ事ができた。お菓子は美味しかったし、ドーナツのゲームに挑戦する事ができたし、アメリカの生徒たちがノリノリで音楽に合わせてダンスをしているのを見るのが最高だった。私はアメリカに来て一番思ったことは、自分自身が成長できたなということだ。日本では歳を取るにつれて、TRYする回数が少なくなっていた。でもアメリカに来て、TRYする事の大切さや、実際にTRYする事が多かった。TRYした事は二度と忘れずに体や頭の中に残ると思う。そして、明日のさよならパーティーでは、本当に今までの3週間の感謝の気持ちを伝えたい。楽しむ事が出来たのは、ケリーやタニーシャ、ホストファミリー等の支えがあったからだと思うので、恩返ししたい。

感想文より

この研修で一番感じたのは、Tryがとても大事だということです。Tryしないと何も始まらないし、Tryした結果、成功しても失敗しても自分の経験で一生記憶に残ると思います。私は期間中数えきれないほどのTryをしました。ファミリーに自分から話しかけるのもTryだし、ゲームで遊ぶのもTryだと思います。最初はTryすることが少なかったですが、アメリカに慣れるにつれ回数が増えました。アメリカに来る前の自分ではあり得ないくらい自分を良い方向に変えることができました。だから日本に帰っても、この気持ちを忘れずに、失敗を恐れず色んな事にTryしたいです。

昨年の参加者体験談

■アメリカでもらった温かさ

沖縄県神森中学校3年 永瀨 優之心

僕が学んだことは、大きく3つある。その中の1つが、「Respectの精神」だ。全く知らない土地から来た僕達をホストファミリーや現地の先生方は優しく迎えてくれた。そして、決して見下すことなく、いつも同じ目線に立って過ごしてくれた。こんな当たり前ではあるが大切なことをアメリカの方々は大切に思ってくれた。僕がパソコンムービーを作った時、ホストファミリーは「君はよく頑張った。」と言ってくれて、僕は思わず涙がこぼれた。相手を敬う心を彼らは決して忘れなかったのだ。僕はここで学んだことを生徒会活動に活かすという目標があったのだが、学校に戻ったらこのことを他の人にも伝え、自分もこのことを大切にしていきたいと思う。アメリカでもらったような温かい言葉がお互いの会話で飛び交うような学校にしていきたい。

■非言語の大きな力

福岡県平尾小学校6年 出田 彩夏

私はホームステイに行ってみて、学んだことがあります。それは、言葉のかべをこえて楽しいという気持ちや悲しいという気持ちを共有するという事です。ホストマザーの11歳と2歳の孫と遊ぶ機会がありました。初めは、言葉もわからないし、その子は男の子だし、仲良くなるのは無理だと思っていました。でも遊んでみたら、その子の陽気さが私を笑顔にしてくれました。またいっしょにステイしていた子も、「言葉はなんかよくわからないけど、楽しいという気持ちは同じなんだろうね。」と言っていました。私は、言葉はよく分からなくても表情などの非言語を使えば、世界中の人とつながることができて、非言語にはとても大きな力があることを学びました。

■人生に影響を与えた出会いと学び

大分県緑ヶ丘中学校3年 藤田 彩乃

私は、アメリカ人の生徒たちからたくさんのことを学びました。まず積極性です。日本人はいつも挙手できる人が決まっています。でも、アメリカ人は必ず全員が手を挙げるのです。私も考えが持てたら、しっかりと自分で表現してみようと思いました。また、ある日の午後、私より一つ年上のアメリカ人の女の子と会話をしました。彼女は、「私には、日本へ行ってみたいとかたくさん夢がある。それまでボーイフレンドはいらない。」とか、「私には、たくさん夢があるけど、少し怖い気持ちもある。だから、実際にアメリカに来てあなたたちは本当にすごいんだよ。」などと話し、私は彼女の言葉に心を打たれました。自分の信念をしっかり持ち、しっかりと伝えられる彼女は本当にかっこいいと思いました。私はこのアメリカに来て、たくさんの人と出会い、そのすべての人が私の考え方や価値観をよい方向へと変えてくれました。私のこれからの人生に強く影響する事となったこの3週間で学んだ事、感じたことを忘れず、これからに生かしていきたいです。

■悔しさからの成功

長崎県長崎南高校2年 丸山 彰護

自分はアメリカ人と話すことを目標にしていた。ウェルカムパーティーの時、4人で遊んでいるホストブラザー達がいた。そこで話かけようと思ったが、結局話することが出来なかったうえ一人で孤立してしまっただけだった。この日のことが悔しくていろんなことに積極的に参加しようと思った。授業や課外授業で質問したり、ホストファミリーとの会話を自ら進んで行った。うまく会話が出来なかったり、相手が理解してくれないことが何度もあって大変だったが、趣味の話をしたり、冗談を言い合ったりするのがとても楽しかった。ファミリーのおかげで、進んで話す勇気を身に着けることが出来た。そして、ある日、ウェルカムパーティーで見かけたあの家族の家に遊びに行くことが出来た。最初は怖かったが、趣味の話や映画や音楽の話をしていくうちに、仲良くなることができた。ウェルカムパーティーの時に遠くから眺めていたあの家族と一緒に写真が撮れるなんて全く思ってもいなかった。アメリカの友達を作れたことがホームステイの中で一番嬉しかった。

■チャンレンジと成長

鹿児島県鹿児島純心女子高校2年 坂元 真優

このプログラムに参加することを決めるまで海外に行くことなんて絶対にないと思っていました。私はあまり人前に出ることが得意ではなく、自己主張が苦手です。そんな自分を変えたいと思っていました。その時、ホームステイにチャレンジしたい、海外を見てみたいと思うようになりました。自分でも、ホームステイに挑戦しようとしているなんて驚きでした。このような思いを抱いていざ挑んだホームステイは私の成長の糧となったように思います。私は、人をリードする力を学びました。今回、グループのリーダーやきよならパーティーの総監督を務めたので、皆を見て自分から行動しないといけなかったり、人より先に動く、指示を出してスムーズに事を運んだりするなど、たくさん学ぶことができました。私が忘れていたり、ミスをしたら、皆が助けてくれたり、カバーしてくれました。また、感謝の気持ちも感じました。私は寮生活をしているので親の有難みを分かっていると思っていましたが、アメリカに来てさらに分かったような気がします。私をこのプログラムに参加させてくれた両親、ホストファミリーの皆にも感謝です。私はたくさんの人に支えられてこのホームステイを成功させることができました。

■第二の故郷 佐賀県唐津東中学校3年 近藤 丈太郎

今回、ホームステイするのも、海外に行くのも初めて、全てが初めての体験だった。日本にいる時に英語で身の回りのことについて話す練習をしてきたのだが、アメリカの初日は話すことより聞き取ることが難しく、ブラザーがどんどん話しかけてくるが、一つも聞き取れなかった。初のアメリカでの緊張とホストファミリーとしっかりやっていけるかという不安でいっぱいだったからだと思う。ホームシックにかかると思っていたが、ファミリーが家族の一員として、迎え入れてくれたおかげで早目に馴染むことができ、アメリカ生活を楽しむことができた。「アメリカの生活、文化を知る」ことを目的にきたのだが、ホストファミリーのおかげで、オークハバーが第二の家になった。本当にホストファミリーには感謝しかない。ファミリーと過ごした3週間は一生の思い出になると思う。この経験が将来に役立つと思うので、これからもどんどんTryしていきたい。

■マザーから学んだ気遣い

沖縄県慶留間中学校1年 村田 一華

私のホームステイ先はホストマザーが1人暮らしの家だった。ガーデニングが好きだと聞いていたので、週末は庭の手入れをするのかと思っていたが、マザーはとてもバワフルで車も運転し、スケートやフェアや動物園など様々な所へ連れていってくれた。その上、私に気を遣ってくれたのか、ほぼ毎日、子どもや孫家族を呼んでくれた。ホストファミリーとして受け入れてくれるだけでもすごく嬉しいのに、さらにそこまでしてくれて本当に感謝だなと思った。また、私の苦手な食べ物も覚えてくれて、それ以外の物で食事を作ってくれた。このことから、ある事を学んだ。苦手な物でも食べるようにすれば、マザーが少しでも楽になる。今度は私からの気遣いだということだ。この学びはホームステイ期間中の反省点でもあると言える。アメリカでは再達成できないが、沖縄で挑戦していきたい。



■異文化体験を通して得た気づき

熊本県松島中学校3年 永野 駿

このアカデミックホームステイプログラムに参加できて、本当に良かったと思います。なぜなら、異文化交流をしながらも、積極性の大切さや何事にもトライすることの大切さを学ぶことができたからです。また、異文化交流をする中で、改めて日本の良さに気付くことができたり、アメリカの日本と違った文化を身を持って、体感できたので、良かったです。例えば、日本の良さだと接客の仕方や、いろんな所の綺麗さなど、今まで当たり前だと思っていた日本の良さに気付くことができました。アメリカの文化は、寝る時間が早かったり、学校の仕組みや交通ルールが違いました。僕は寝る時間が早いのは、とてもいいなと思います。なぜなら睡眠時間をしっかりと確保することができて、1日のスタートを気持ち良く始めることができるからです。日本に帰ったら必ず取り入れたいです。

■忘れられないスープの味

長崎県長崎東中学校3年 松田 さつき

今までずっと日本人は優しく、礼儀正しくて、日本は良い国だ、日本に生まれてよかったと思っていました。今回のホームステイで私はアメリカの生活を知り、アメリカ人の優しさや明るさを知りました。イメージとは全然違って本当に心が広くて、私もアメリカ人みたいなフレンドリーさが欲しいなと思いました。その中で、切実にもっと英語力をつけたいと思いました。日々の生活では、少し自立できたかなという気がします。今思えば、結構長い間キッチンにいたんだなという感じです。ホストマザーと一緒に料理するのは楽しかったです。いまだにネイビービーンズスープが忘れられないです。日本の外に出たことで私に足りないもの、知らなかったこと、たくさんを知ることができ、温かい家族に出会い、優しい人々に出会うことができました。もっともっと関係を続けていきたいです。

■想像以上の学びと成長

宮崎県宮崎大宮高校1年 船元 恵美

ホストファミリーは、私を本当の家族のように扱ってくれて、色々なことを体験させてくれました。日本だったらお客のように扱うのが礼儀だと思うけど、24日間それで過ごすとお互い疲れるので、私はアメリカの方がいいと思いました。このプログラムに参加した目的が、「視野を広げること」だったけど、想像以上にたくさんのことを学べて、変わったと思います。アメリカの人たちは優しく、ゴミを落としてしまった時に、何人もの人が一緒に拾ってくれたり、知り合ったばかりだけど、たくさん褒めてくれたり、私もそんな人になりたいです。これまで、知り合いの人に会っても、相手が手を振るまで何もなかったり、初対面の人とも話せなかったりしたけど、このプログラムを通して、少し社交的になったと思いました。この24日間で、アメリカの文化や考え方と、外から見た日本を知ることができました。

■言語という壁を越えるコミュニケーション力

沖縄県開邦高校1年 加蘭 太一

後悔しているのが、英語力と自国についての知識、理解がもっと必要だったということです。ホストファミリーが楽しそうにおしゃべりしていたり、ニュースのリポーターが話している内容が理解できなかったで、さらに英語力を鍛えれば米国生活をもっと楽しめたと思います。また、日本の地元について理解があれば、話題を作り、もっと会話の幅が広がっていたと思います。私は、自分の地元のことは全部知ったつもりでいましたが、何日か経つと日本や地域について紹介する内容が減っていききました。この経験から、これまでテストなどで良い点数を取り、希望の大学にいくためという程度としか考えていなかった学習に対して、意義を見出すことができました。その上、とても重要でありながら、成績などでは、あまり重視されていないことの大切さにも気付きました。それはコミュニケーションの大切さです。英語で何というかわからない単語は指を指したり、ジェスチャーで伝えることが度々ありました。コミュニケーションを取るだけで、自分が元気だということも自然に伝えられ、ホストファミリーにも私にも笑みが生まれます。そしてこの一番の強みは、言語という壁を越え、どのような人々とも意思疎通をはかることができることにあります。改めてこのことを強く実感しました。



■挑戦の果ての大きな自信

鹿児島県加治木高校2年 宗岡 泰斗

学校へ行かなくなってから、ほぼ毎日家の中で過ごしている僕にとって「ホームステイをする」という決断はあまりに無謀な挑戦だったかもしれませんが、しかし、何かを得られるわけでもなければ、何かを与えられるわけでもない日々を変えたいという思いが強くこのホームステイの参加を決定しました。アメリカに行くためには準備が必要でした。日本の自分のことを紹介するための写真を撮ったり、日本円をドルに換金しに銀行に行ったり、必要な物をそろえたり、自分で時間を作り、全て自分で準備しました。しかし、写真を現像することも、また銀行の受付の仕方さえ僕は知りませんでした。アメリカで生活する以前に、日本で生活することもままならないのです。僕がどれだけ見えない誰かに頼っているのかという現実を痛感させられました。アメリカでの生活は本当に新鮮でした。毎日授業を受けて、活動をして、何よりホストファミリーとたくさん話をしました。1日、1日が充実感と達成感、疲労感でいっぱいでした。とてつもなく長く感じた1日があっという間の1日となりました。毎日新しい発見を得ることができ、そして、ホストファミリーに新しい発見を提供することができました。ホストマザーから「あなた達から得る物は、私達が与える物以上のものばかりです。」という言葉にはとてつもない幸福感と、なんとも言えない恥ずかしさを感じました。この経験が、大きな自信になっているのは確かだと思います。

■失敗とファミリーの優しさ

宮崎県宮崎学園中学校2年 荒井 啓太

僕は他の友達と一緒に2人でホームステイしました。最初はすぐに口論になったり、ケンカになったりしたこともありましたが、時間が経つにつれて、2人で協力して、ホストファミリーへお世話になっているお返しとして、お好み焼きとおにぎりを作ってあげました。と言っても、2人とも料理の練習不足で、友達はお好み焼きを上手にひっくり返せず、結局ホストファミリーに「これはスクランブルお好み焼きです。」と言って、ごまかしてしまいました。僕もお米を炊く時に失敗して、水の量を間違え、少し固いおにぎりを食べさせてしまいました。でも、ホストファミリーはそれを食べて、「とても美味しかったよ。よく頑張ったね。ありがとう。」と言ってくれて、ファミリーの優しさを身をもって感じるすることができました。

■自分のことは自分です

鹿児島県伊集院中学校1年 川崎 菜子

このプログラムで学んだ事は山ほどあります。時間を見て行動することの大切さ、周りを見て行動すること、人に甘えず自分のことは自分ですること等です。日本では部屋の掃除、ベッドメイキング、お皿洗い等、全て母に任せていました。しかし、アメリカではそうはいきません。掃除とベッドメイキングは毎日頑張りました。お皿洗いは、洗い物がたくさんたまっている時は、ななみちゃんと役割分担をして積極的に行いました。また、英語も沢山学びました。最初は授業が全く分からず、内容が全く分からない日々。でも今は違います。前まではデジー先生に授業中当てられても何も言えませんでした。ただ考えて、誰かの助けを待ただけでした。今も自分から発表できるような英語のうまさではありませんが、答えを自分の頭で考えて、自分で正解を見つけることができました。

■日本人と同じアメリカ人の温かさ

大分県くす星翔中学校2年 原 菜々子

アメリカに来て最初に学んだのは、アメリカ人のフレンドリーさです。まだ話したこともない私を心優しく迎え入れてくれました。外国に来るのも初めて、こんなに長い時間家族と離れるのも初めての私にとって、その優しさ、親しみやすさは、緊張の糸をほぐしてくれました。マザーはとても優しい人でした。聞き取れない、話せない私を見捨てず、ゆっくり話したり、分かりやすい言葉を使ったり、たくさんの心遣いをくれました。二人のシスターとは、私が日本から持ってきたおもちゃや、アメリカのゲームなどたくさんの時間を遊んで過ごしました。大人びた性格のシスターも遊ぶときは声をあげて笑っていて、親近感がわきました。「アメリカ人でも日本人でも大切な人がいて、幸せがあるのは変わらないんだ！」私がそう思ったのは、アメリカに来る前、「この世界の片隅に」を見たのがきっかけです。それを見て、私の頭に一つ疑問が浮かび上がりました。「アメリカ人でも日本人でも、きっと大切な家族がいて、幸せな生活がある。それなのに、どうして、それを知りもしないで、戦い合うんだろう。」その答えは見つからなかったけど、日本人と同じような温かさをアメリカ人に感じられたホームステイでした。

■人生を支えてくれる経験

沖縄県読谷高校1年 飯田 来未

アメリカで、一番興味を持ち、驚かされたことは、アメリカの学校についてです。アメリカは制服もないし、髪の色やメイク、靴も、何にも縛られていなくて驚きました。少し羨ましく思うけど、日本は校則によって生徒が統一されるからこそ、他の国からも憧れられるような日本人気質が備わるのかなと思い、日本で生まれて良かったと思いました。また、アメリカの子どもたちは、家事の手伝いをすることでお小遣いをもらえるということを知って、とてもえらいなと思います。日本ではたいていの場合、月に一度お金はもらえるけれど、アメリカでは、自分が手伝ったことへの報酬としてお金をもらえるので、この方法がいいと思いました。アメリカのような方法をとれば、大人になった時でも、仕事をすれば、お金を得られるということが分かっているの、困らないと思います。アメリカで3週間暮らして、日本との違いをたくさん知りました。それと同時に、アメリカの良さと日本の良さを見つけることができました。毎日が発見の連続でした。ここで学んだ事、感じたこと、作り上げたもの、全てが私のこれからの人生を支えてくれるでしょう。そして、支えられる度にアメリカで過ごした3週間を思い出すでしょう。

■きっと乗りこえられる

長崎県広田小学校5年 濱本 志道

アメリカで色々なことがあったけど、楽しかった。親に会いたくて悲しくなったときもあったけど、悩まず友達やホストファミリーに話すといい。悩みを一人でかかえると、もっと悲しくなってしまう。でも悲しいことばかりではなかった。悲しいことより楽しいことの方が多かった。たとえば、大きな山に登って疲れたけど、友だちといっしょに登って、絶景をいっしょに見た。がんばって登ったからこそ、とてもきれいにみえたと思った。次のホームステイに行く人たちに言いたい。本当に悲しいときもあるかもしれないけど、でも乗りこえられる。

■出来るようになる喜び

宮崎県宮崎学園中学校2年 上山 まりあ

プログラムを通して、感じたことがたくさんあります。自分の英語力のなさ、時間の早さなどマイナスなこと、アメリカの食べ物のおいしさ、環境の良さなどプラスなこと、本当にたくさん感じさせられました。それを感じるたびに、マイナスなことはどうしたら改善できるか、プラスなことはこのまま続けようと、次につなげて考えるようにしました。これまでは、失敗したらそれで終わり、何もせず、何も考えていませんでした。それが次につなげて考えられるようになったのは、一つの成長だと思います。そして、ホストファミリーにずっと言っていた「Can I help you?」は、これからも母などを中心に使い続けたいです。文化、食事、生活が全く違うアメリカでの生活は、初めはとっても厳しいものだったけれど、ホストファミリーの支えでうまく乗り越えられました。最初は難しかったことが出来るようになる喜びは、自分の成長を感じる時間でした。

■目に見えない糸でのつながり

熊本県熊本北高校2年 工藤 由暢

24日間とはいえ、まるで僕の人生かのように一つ一つの出来事や体験が凝縮されたホームステイであった。もしこのホームステイに参加していなかったらと思うと、僕は本当に素晴らしい決断をして、それを実行したと思う。なぜなら、今後の自分の人生に影響を与えることができるからだ。ホストファミリーと会った日から最後の別れまでの一瞬一瞬の出来事や体験全てが、僕の思い出。初めてホストファミリーと会った日は、緊張しすぎて、何をしゃべっていいか分からずに困り果てていた。でも僕はこの時からホストファミリーが自分を受け入れてくれたことに気づき、その分、僕も最後にこのファミリーと暮らせてよかったという思い出と一緒に残したいと思った。ファミリーと過ごした時間があまりにも楽しかったため、最後の日に自分の中に溜まった思いがぼろぼろと溢れ出た。雨が降ればごまかせるのに、ここは夏のカリフォルニア。乾燥していて、それはできなかった。別れはあっても、いつかまた出会いがやってくると信じている。なぜなら僕とファミリーは目に見えない糸でつながっているから。今度は、僕や子ども達が大人になってお酒が飲めるようになったら、ビール一杯手に飲み交わしたいものだ。

■成長できるチャンス

佐賀県唐津東高校1年 古瀬 方稀

私はこの3週間で自分に自信が持てました。その理由はまず1対1で、誰にも頼れない環境が私にとってはとても成長できるチャンスでした。ホストファミリーに何か尋ねられた時、自分が知っている単語を探して正確に伝える力や、何を尋ねられたか分からない時、正直に「I don't know」と言う勇気が3週間のプログラムを終えた今、身についたなと感じます。二つ目の理由は、アメリカの人々と会話をしたこと。アメリカ人はとても元気で親切な人ばかりでした。だから、私が文法や単語が間違った文を言っても理解しようとしてくれるし、ジェスチャーや実際にものを取ってきてどうにか考えを共有しようとしてくれました。そのおかげで私は失敗を恐れずにどんどん話しかけたり、あわてずに会話を楽しむことが出来ました。これらの経験により3週間前よりも積極性や挑戦したいと思う気持ちが強くなったと実感しています。

■アメリカに来ないと分からない学び

鹿児島県舞鶴中学校2年 黒山 優樹

僕が学んだ事は、何事もまず自分の目で見たり、体験して確かめることです。アメリカには電気炊飯器はないと色々な人にも聞いていましたが、実際は家に炊飯器があったり、たくさんの人が白米を食べていました。他にもアメリカ人にも内気な人はいるし、そこまで食べるわけではありませんでした。正直に思うことは、異文化を学ぶことを若い内にやって良かったということです。日本には「郷に入れば郷に従え」ということわざがありますが、ホストファミリーやアメリカの人達は自分達の文化を押し付けはしませんでした。むしろ日本の習慣や文化の違いをよく理解してくれたと思います。日本を出発する前に、いろんな友達に「英語ペラペラになって帰って来いよ。」と言われ、「いいや、英語じゃなくて、アメリカのカルチャーを学びに行くんだよ。」と言うと、「それなら別にアメリカに行く必要ないじゃん。」と返されるのがほとんどでした。でも、アメリカに来ないと分からないこともたくさんありました。このホームステイで学んだ事を常に頭に入れて、生きていこうと思います。



■アメリカ人と日本人の優しさ

宮崎県鏡小学校5年 堂領 美七海

このホームステイを通していろんなことを学びました。まず1つ目はアメリカ人の優しさです。アメリカ人のいいところはシャイじゃないところと、あたたかいところだと思います。日本人もあたたかいけど、オープンじゃないから、それがちがいだと思いました。2つ目は日本人の優しさです。日本人のいいところは、すごく優しくて、おもてなしのあることだと思います。日本人はすぐ「だいじょうぶ？」などと声をかけてくれるから、思いやりの心があるなと思いました。3つ目はホストファミリーの優しさです。ホストファミリーは小学生2人も受けて入れてくれて、すごく優しいなと思いました。そしてファミリーは毎日何が食べたいか聞いてくれます。アメリカ人がすごく優しいから、まだアメリカにいたい気分です。

■アメリカでのサッカー体験

長崎県西陵高校1年 新田 航太郎

まさかアメリカでサッカーの練習やミニ大会に参加できると思っていませんでした。練習では僕は小さい子供たちのコーチをさせてもらいました。みんななかなか言うことを聞いてくれず、僕が練習内容を説明しても違うことをしていて、まとめることの難しさを知りました。ミニ大会はフットサルのようなものでした。同じ年でも体が強かったです。僕のチームは優勝して、メダルやリストバンドをもらえたのでとても嬉しかったです。僕がアメリカの家族と過ごして分かったことは、みんなとても仲が良いということです。なぜなら、ハグをたくさんして、電話を切るときには必ず“I love you”と言っているからです。そして、僕も家族と同じように接してもらえて、とても嬉しかったです。

■不安を吹き飛ばしてくれたファミリー

千葉県宮田小学校6年 西永 夏帆

飛行機に乗る前、ホストファミリーとちゃんとしゃべれるかどうか、英語が通じるかどうかなど、すごく不安でした。しかし、ホストファミリーと会って、家に着く頃にはもうそんな不安はなくなっていました。理由は、すごく元気なホストファミリーで、不安がふっとんでしまったからです。ホストファミリーは夫婦とふたごでした。ホストファザーはおとなしいけれど、ちょっとおもしろいところがあって、ホストマザーはすごく元気で、いっしょにいたらすごく元気がわいてくるような人でした。ふたごは、すごくかわいくて、このホストファミリーでよかったと思いました。2週間すごく楽しい時間を過ごせたと思います。

■英語への壁を壊すことができた

熊本県済々黌高校1年 徳永 温加

人としてたくさん成長できたと思うのは、英語で生活すること、最初は「通じなかったらどうしよう」とか、「間違っているかな」とか不安しかなかったけど、今は「通じなければ、もっと違う方法で伝えよう」とか、「間違っても良い」というように英語に対しての壁を壊すことができたところかなと思います。また、アメリカでは、「どちらでもいい」ではなく、「はい」、「いいえ」など、はっきりした回答を求められることが多くて、きちんとした返しができるようになりました。日本人は、周りに気を遣える優しさがあって、そこが日本人の良さの一つでもあるけど、はっきりとした意思表示もとても大切なことだと思います。だから、日本に帰っても、そこはアメリカ人にならおうと思います。

■机上の学問では分からない体験

沖縄県沖縄尚学高校2年 宮里 萌

アメリカで一番好きになったのは「人」です。私はとても素晴らしいホストファミリーに恵まれました。期間中ストレスも感じずに、リラックスして過ごせたのもファミリーのおかげです。アメリカでは、他のホストファミリーにも会う機会があり、変に硬くなりすぎずにお互い笑いあって素晴らしい時間を過ごし、日本では出来ない良い経験ができました。また、携帯電話を3週間全く使わない環境の中で、家族や友達とのコミュニケーションの大切さを知ることが出来ました。何かに縛られずに生きるとあって素晴らしいと思いました。何をしてもなく外でボーっとしているだけでも、心が満たされることにも気づき、机に向かうだけでは分からない事を学びました。



■Noko's adventure

大分県玖珠美山高校3年 戸高 のこ

将来日本の文化に携わる仕事に就きたいと考えています。日本が大好きで、海外の人から見る日本の印象や他の国を知って、日本の良さを知りたいと思い、ホームステイに参加しました。世界でも大きな国アメリカは、日本とどう違うのだろうととても興味がありました。私はものを作ることと、絵を描くことが大好きなのですが、私のホストマザーも同じでした。3週間、本当にたくさん私のことを私にしてくれました。初日に、いきなりプレゼントをもらい、中にはNoko's adventure (ノコの冒険) と書かれた、かわいいノートとシール、マスキングテープセットが入っていました。本当に嬉しかったです。毎日発見した事や今日の出来事を英語で絵日記を書きました。学校や家ですること全部が初めてのことばかりでした。アメリカの人と接していくうちに、アメリカ人は優しい人ばかりで、本当にたくさん楽しむことができました。毎日が私の大切な思い出です。

■たくさんのことを学んだ

鹿児島県加世田中学校2年 森川 飛鳥

今回のホームステイで学んだことがたくさんある。1つ目は自己主張をすること。アメリカは自分で思っていることを言わないと何も伝わらない。日本ではあまり自己主張をしなくても伝わることもあるけど、アメリカでは自己主張をしなければならない。私の苦手な自己主張を少しだけ克服できた気がする。2つ目は、自信をもって話すこと。英語は自信を持ち、ハキハキとしゃべらないと伝わらない。私は人前で話すことが苦手で、学校で当てられて発表するとき、いつもしゃべっている途中で「声が聞こえない」と言われる。自分でも自信を持って話さなきゃとは思っているつもりでも、実際はみんなには聞こえていない。でもアメリカにきて、少しは大きな声で話せるようになった。ちゃんと自信を持って、大きな声でしゃべるのはとても緊張するけれど、みんな聞いてくれる。日本に帰っても、それを生かせるようにしたい。3つ目は感謝すること。誰にでも感謝することはとても大切。なんだかんだいって色々なことに恵まれている。この感謝をみんなに伝えられる人になりたい。

■笑顔で明るい国、アメリカ

宮崎県日向高校1年 戸高 輝人

アメリカ人はみんなずっとニコニコしていて、この国にいただけで、本当に明るくいられると思うほど、いつもみんな楽しそうだった。何かあったらすぐ声をかけてくれるし、誰かが物を失くしたら、自分の物のように必死で探してくれる。本当に素晴らしい人たちがたくさんあった。アメリカ人が当たり前のようにしていることに、尊敬する部分がたくさんあった。また、期間中一番学んだと思うことは、「感謝」だ。アメリカ人はちょっとしたことで「Thank you.」と言い、みんなが感謝の気持ちをしっかり表現していて、とてもいい国だと思った。このように感じさせてくれたのも、色々な人との出会いを作ってくれたのも、全てが両親や家族のおかげだと思う。日頃から一生懸命仕事や家のことをしてくれているおかげで、このプログラムに参加できた。日本に早く帰って、すぐ家族に「ありがとう。」と言いたい。これからは、しっかり感謝の気持ちを言葉や行動で表現し、出会いを大切に、生活していきたい。

異文化体験報告会の資料から

※原則的に、二つ以上の複数回答を掲載しています。多数と追記されているものは、五つ以上の複数回答を意味します。

■プログラムを通じて何を学んだか。

- 友達や親の大切さ。(多数)
- 自分のことは自分でするという。(多数)
- 何事にも挑戦する心。(多数)
- 家族の絆や、家族愛。(多数)
- 英語のヒアリングがかなりついた。(多数)
- 人に優しくすること。(多数)
- 言葉で相手に伝えるということ。(多数)
- 日本とアメリカの文化の違い、生活の違い。(多数)
- 言葉は通じなくても、心が通じ合えば大丈夫。(多数)
- 努力すれば必ず「結果」がでること。
- アメリカの良い所と悪い所、同時に日本の悪い所と良い所。
- 百聞は一見にしかずということ。
- 自分が井の中の蛙だったということ。
- 自分のことは自分でする。
- 言うべきことは、言わなければならないということ。
- 自分のためではなく、人のために行動すること。
- キリスト教を体験することで、他人を尊重することを学んだ。
- 何故、英語が必要であるかということ。
- 自分が今何をすべきかということを学んだ。
- ルールを守ることの大切さ。
- ホストファミリーの愛情の深さ。
- 日本がどれだけ小さいかということ。
- 愛について学んだ。
- 人種は違っても同じ人間だということ。
- 「自分」をしっかり和持たなければいけないということ。
- 常に感謝の気持ちを持つこと。
- 自分が笑顔だと相手も気持ちがいいということ。
- 問題にぶつかった時、立ち向かう勇氣。
- 他人の親切、親の親切を学んだ。
- 英語が通じることの喜び。
- 自分の視野の狭さを痛感した。
- 友達はとっても大切であるということ。
- 人間の素晴らしさを学んだ。
- 自然を大切にすること。
- 簡単にあきらめないという心。
- 伝える気持ちがあれば、コミュニケーションができるということ。
- 何事もよく考えて行動すること。
- 助け合うことの大切さ。
- 人間、言葉じゃない。
- 自分で抱いた意志を、他人によって変えない。
- 信頼したり、信頼してもらえることの大切さ。
- 何でも許せる心の広さ。
- 大切なのは、言葉ではなく、思いやること。
- 自己主張の大切さ。
- 何でも興味を持つことの大切さ。
- 英語は勉強ではなく、コミュニケーションの手段であること。
- 自分の考え方一つで、良くも悪くもなるということ。
- 意見を持つことの大切さ。
- 自分で感情をコントロールすること。
- 隣近所の方々と良好な人間関係のありかた。
- 自分からしゃべること。
- 困ったときでも、がんばること。
- 知識だけではいけないということ。
- 日本という国に誇りを持つこと。
- そのとき、そのときを大切に過ごすということ。
- すべての人が平等であるということ。
- 英語はできる方がいいが、大事なものは人の中身である。
- 笑顔の大切さ。
- 人の話を目を見て聞くこと。
- 一人一人を大切にすること。
- 受身であつたらいけないということ。
- 自立とは何かということ。

■プログラムに参加して、自分が変わったこと。

- 積極的になった。(多数)
- 明るくなった。(多数)
- 親や家族、周りの人に感謝するようになった。(多数)
- いろんなことに対して自信を持てるようになった。(多数)
- 前向きにものを考えるようになった。(多数)
- 家事の手伝いをするようになった。(多数)
- 人前でも、ものおじしなくなった。(多数)
- 人のことを考えるようになった。(多数)
- 英語を学習したいと思うようになった。(多数)
- 他人を思いやる気持ちが出てきた。(多数)
- ありがとうと言えるようになった。(多数)
- 何事にも、トライするようになった。(多数)
- 外国人と話すことに抵抗がなくなった。(多数)
- 自立できるような気がしている。(多数)
- 前より大人になった。(多数)
- よくあいさつをするようになった。(多数)
- 初対面の人でも親しみを持てるようになった。
- 授業中の声が大きくなった。
- 学校で手を挙げるようになった。
- 自分から人に話しかけたり、自分から行動するようになった。
- 「みんなのために」と思って頑張るようになった。
- 新しいこと、初めてのことに度胸がついた。
- 英語を学ぶ姿勢が変わった。
- ボランティア活動に興味を持つようになった。
- 自分が自分らしくいられるようになった。
- 精神的に強くなった。
- 自分で食事を作るようになった。
- いつもニコニコ笑顔になった。
- 自分の考えを表現できるようになった。
- 諦めない、強い心を持てるようになった。
- 「はい」「いいえ」をしっかり和判断できるようになった。
- 最後までやり通すようになった。
- 自ら進んで取り組もうとするようになった。
- 素直になった。
- 優柔不断でなくなった。
- 責任感が出てきた。
- 一人でも行動できるようになった。
- たくましくなった。
- 協調性が身についた。
- 好き嫌いが少なくなった。
- 恥ずかしがらずに、行動できるようになった。
- はっきり言うようになった。
- 何かしら、良い所を見つけられるようになった。
- 心が広がった。
- 自然に笑えるようになった。
- 自分の人生そのものが変わった。
- 勉強熱心になった。
- 友達をたくさん作りたいと思うようになった。
- 英語の時間が楽しになった。
- 両国の価値観の二方向から見るできるようになった。
- 自分で考えて行動するようになった。
- 海外に目が向くようになった。
- オープンになった。
- 英語を話すことを恐れなくなった。
- 顔の表情が豊かになった。
- 物事を大きく捉えられるようになった。
- 死ぬほど悩んだりすることがなくなった。
- 生きていることに感謝するようになった。
- 愛の意味がわかりかけてきた。
- コンプレックスがなくなった気がする。
- わからないことは聞くようになった。
- 勇氣と根性が身についた。

これまでの引率指導者

[illegible]

アカデミックホームステイプログラム参加申込書

会員コード	
-------	--

県	小	中	高	大	県 番 号		小	中	高	大	全 体 番 号		担 当 者 名	

※この書類はセンターの管理上の目的だけでなく、引率指導者の指導上の目的のためにも利用されます。

ふりがな			男 女	生 年 月 日	年		月		日		
氏名					(満才)						
参加コース	☐ 小学生コース(15日間) ☐ 中・高・大学生コース(24日間)		希望 発着空港	☐ 福岡 ☐ 大分	☐ 熊本 ☐ 那覇	☐ 長崎 ☐ その他 ()	☐ 鹿児島	☐ 宮崎			
(ふりがな) 現住所	〒 () - () 都・道 府・県		市 郡	☎ () () - ()							
(ふりがな) 家族の住所	〒 () - () 都・道 府・県		市 郡	☎ () () - ()							
連絡先	保護者携帯電話： () - () - ()			自宅FAX： () - () - ()							
	保護者携帯メールアドレス：										
	パソコンメールアドレス：										

※今後、携帯やパソコンのメールアドレスに、プログラムに関する連絡を差し上げる場合がございますので、ご了承ください。

学 校 名	卒 業 年 月	学 校 名 ・ 学 年	
小学校	年 月	学校 年在学中	
中学校	年 月	担任教師	
高 校	年 月	英語教師	

写 真 不 要	
------------------	--

続柄	氏 名	生 年 月 日		職業 (会社名及び学校名を具体的に)	コード
父		昭	平		
母		昭	平		
		昭	平		
		昭	平		
		昭	平		
		昭	平		

ステイ地	
------	--

正式書類 申込金	月 日	渡 送	
	月 日	受 領	

得意な科目	1. 2.	不得意な科目	1. 2.
趣 味	特 技		
長 所	短 所		
持病・既往症	無・有 ()	部 活 動	
英語の成績	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	説明会に出席 しましたか？	☐ はい ☐ いいえ ☐ その他 ()
このプログラムを 何で知りましたか	1. 新聞・ラジオ 2. ポスター 3. ホームページ 4. 先生 () 5. 参加者 () 6. 知人 ()		

過去に参加された方を知っていたら その方の名前を記入してください。			受 付	
今回一緒に参加される友人がいたら 名前を記入してください。				
申込金	申込金50,000円は ☐ 年 月 日 () 銀行に振り込みました。 ☐ 申込書と一緒にセンターに現金書留で送ります。 (注) 送金の場合は「参加者名」にてお振り込みください。			
旅 券	有・無	※有の方：有効期限 年 月まで ※無の方：早急に旅券申請を行ってください。	渡 航 歴	有 (国名) 無

米国国務省人物交流計画に基づく 米国公立高校交換留学 2021年度 第38期生募集

このプログラムは1961年に米国国務省により定められた「青少年の教育文化交流に関する規定」に基づいて企画され、実施するものであり、米国公立高校への正式な留学制度です。その目的は、日米両国民の友好と親善を深めると同時に、青少年の国際人の育成を目的としております。

✎ 留学内容

8月下旬に出発し、アメリカの一般家庭にホームステイしながら、米国高校交換留学生として、約10カ月間米国公立高校に在籍し、異文化交流、相互理解を行いアメリカの高校生と一緒に学習し、単位を取得する。

✎ 留学期間 2021年8月下旬～2022年6月中旬

✎ 募集人員 20名

✎ 留学生参加費用 1,480,000円

✎ 出願締切日

第1次募集 出願締切日 2020年5月31日
第2次募集 出願締切日 2020年9月14日
第3次募集 出願締切日 2020年11月16日

※ 定員になった時点で締切りますが、定員に達しない場合は、第3次募集締切り後も、個人ベースで出願希望者には対応します。

✎ 参加資格

- 1 出発時、15歳以上18歳以下の高等学校第1学年、第2学年、第3学年に在籍する男女生徒
- 2 中学1年次以降における学校での5段階評価がいずれも3以上であること
- 3 心身ともに健全で、異文化理解の習得に熱心であり、交流体験を真に希望する者
- 4 出発までの事前学習を終了できること
- 5 オリエンテーションの内容を修了できる者
- 6 参加者、保護者とも、パンフレットの内容と配布された資料を十分に理解し、センターの指示・決定事項を遵守できること
- 7 出発までに、ELTiS212以上のスコアを取ること

◎ パンフレットの必要な方は「南日本カルチャーセンター 高校留学係」までご連絡ください。

参加者へのアンケート

■ 留学生のあるべき姿とは、どのようなものだと思いますか？

- ・何に対しても積極的でなければいけない。
- ・常に自分の留学の目的を持つべきだ。
- ・いつもいろんな人に対して感謝の気持ちを持つこと。
- ・人それぞれにいい所、悪い所もあるから、みんなの事を好きになれるよう努力すること。
- ・「待つ」のではなく、「自分から」という心構えで友達と接したり、授業を受ける。
- ・自分の国、文化に誇りを持つこと。
- ・「留学生だから」という甘えは持たない。
- ・辛くても投げやりにならない。目の前の問題から逃げない。
- ・「自由」の意味を勘違いしないこと。なんでも好きなことをしていいのが「自由」ではない。
- ・落ち込んだっていい、そこから立ち直ればいい。
- ・小さなことでめげない、強い人間になる。
- ・相手に求める前に、まず自分自身のことを振り返ってみる。
- ・自分の行動に責任を持つこと。

■ 日本と米国の高校における違いは何だと思いますか？

- ・アメリカの高校は、日本よりもっと先生と生徒の関係が近いが、でもその為に、生徒が先生に対して失礼と思われることもしばしばあった。
- ・米国の高校は生徒に全ての判断を任せ、個性を伸ばすことに重点を置いている。
- ・日本人は依頼心が強く子どもっぽいが、米国人は独立心が強く大人である。
- ・日本人は物知りでも自己主張ができない。アメリカはその逆。
- ・授業中、先生とのやり取りが多い。何を質問しても、先生は怒らず聞いてくれる。だから授業中寝てる人もいない。
- ・エッセイやレポートなど、自分の考えをまとめる宿題が多いのがアメリカの高校。
- ・米国には、積極的な生徒はどんどん進めるシステムがある。

■ この留学で得たものは何だと思いますか？

- ・忍耐力と独立心。
- ・英語力。
- ・日米両国の友人の素晴らしい友情。
- ・生きることの難しさと自己管理の大変さ。
- ・感謝する心。
- ・前向きに考えること。
- ・未来への希望。
- ・自信。
- ・自分をコントロールできるようになった。
- ・笑顔が多くなった。
- ・達成感。
- ・人生を楽しいと思える心。

■ これから留学を志す生徒さんに先輩としてのアドバイスをお願いします。

- ・とにかくうるさいぐらい積極的に話すこと。
- ・あんまり力まないで気楽にね。
- ・友達作りに1年間気合を入れてください。
- ・基礎的英語力を身につけておく。
- ・楽しいことばかりではなく、つらいことの方が多いということを出発前に覚悟しておくこと。
- ・アメリカに行っても自分たちは日本人なのであり、日本人としての誇りを持つべき。そして日本に帰っても日本人らしく生きる。
- ・依頼心は一切捨ててください。
- ・アメリカの映画や音楽を見て聴いておくと、話題にもなるし、アメリカそのものを幅広く理解できる材料の1つです。
- ・何でも待ってたんじゃダメ。自分から行くこと。
- ・辛いけど、それ以上に得られるものがある。
- ・分からないことは恥ではなく、当然のことだと頭に入れておく。
- ・自分をしっかり持ち、見失わないこと。そして、自分で道を作ること。



お問い合わせ・お申し込み先

旅行企画・実施 (株)南日本カルチャーセンター

〒890-0056 鹿児島市下荒田3丁目16番19号

TEL 099-257-4333(代表) お問い合わせ専用 ☎ 0120-212122

観光庁長官登録旅行業第1355号 (社)日本旅行業協会正会員

総合旅行業務取扱管理者 平原靖子

ホームページ <http://www.mncc.jp>